



TITLE:

獸環・鋪首の若干をめぐって

AUTHOR(S):

林, 巳奈夫

---

CITATION:

林, 巳奈夫. 獸環・鋪首の若干をめぐって. 東方學報 1985, 57: 1-74

ISSUE DATE:

1985-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/66644>

RIGHT:

# 獸環・鋪首の若干をめぐって

林 巳奈夫

(1) 前言	一頁		
(2) 牛角つきの獸環・鋪首	二頁		
(3) 別類の牛角つきの獸環・鋪首	二五頁		
(4) 牛角つきの獸環（角の扁平化した類）	二九頁		
(5) 渦卷眉の獸環・鋪首	三〇頁		
(6) 外反尖葉形葉狀部分つきの獸環・鋪首	三三頁		
		(7) 外反尖葉形葉狀部分つきの獸環・鋪首（長い型）	三六頁
		(8) 渦卷眉の獸環・鋪首（額に長毛）	四一頁
		(9) 羊角の獸環	四七頁
		(10) 錢舌狀部分つきの獸環	五二頁
		(11) 所謂長獸と獸環・鋪首	五四頁

## (1) 前言

『東方學報』五六冊に筆者は「所謂鑿紋は何を表はしたものか——同時代資料による論證」を書き、殷、西周時代の所謂鑿紋が帝であつたことについて論證を行つた。その際、西周後期以後青銅器からそれが姿を消して以後、その圖像がどうなつたかについては詳しく研究する餘裕を持たなかつた。鑿紋がその後どうなつたかについての消息はあまり明かでないが、殷、西周時代に鑿紋とよく似た形に表はされるが、それより一段と格の下る神格として位置づけられる犧首については、春秋以後にも青銅器の上にそれ以前と同様な形で使はれつづけてゐるため、年代を追つてその變遷のあとをたどることができる。獸環・鋪首と呼ばれるものがそれである。その系列をたどつて六朝時代にまで至り、圖像の性格の知

られるものに行き會つた時、その遙かに遡る殷周時代の祖先に對して加へた筆者の推測の確認される事例が出てくる。中國の傳統性の強さに改めて驚かされることである。

春秋戰國から漢頃の獸饗・鋪首は種類が多く、當然のことであらうが傳統の途中で絶えるものもあり、また由來を明かにし難いものも少くない。ここではそのやうな類は暫くおき、系統が或程度の期間にわたつたどられるものののみを取り上げて論ずることにする。

殷・西周時代の犧首やその春秋以後の後裔である獸饗や鋪首の類は、その角乃至その位置にある身體部分の形で分類するのが便宜である。獸饗・鋪首は目、耳、鼻面、口などの形において類型的な表現をもつが、それらの形によつてはつきり區別のつけられるものが多い。この點は殷、西周時代の饗饗・犧首についても言へることである。

前引の饗饗紋の論文に記したやうに、殷、西周時代の犧首は通常頭部だけで表はされるが、中には稀に身體も一緒にいつてゐる例がある。また春秋、戰國時代の獸饗も、動物形の身體を持つた形で表はされるものがあり、これらも本來身體を持つた鬼神であるが、通常はその頭だけが使はれる習慣になつてゐたのである。兎もあれ、身體と共に表はされること<sup>①</sup>があまりないため、身體の特徴は分類の標準として使ひ難い。以上のやうな理由で、ここでも獸饗・鋪首を主として角乃至その位置にある身體部分の形によつて分類して論ずることにする。

## (2) 牛角つきの獸饗・鋪首

以前に筆者は「中國古代の獸面紋をめぐつて」<sup>②</sup>を書き、その中で羸（また羸とも書く。水中にゐるタニシや陸産のカタツムリのやうな巻貝のこと）<sup>③</sup>に當る文字と周代の圖像を同定した。<sup>④</sup>その要旨は次のごとくである。



圖1 鳳に從ふ西周金文



圖2 鳳を象つた玉器，西周中期，Minneapolis Institute of Arts

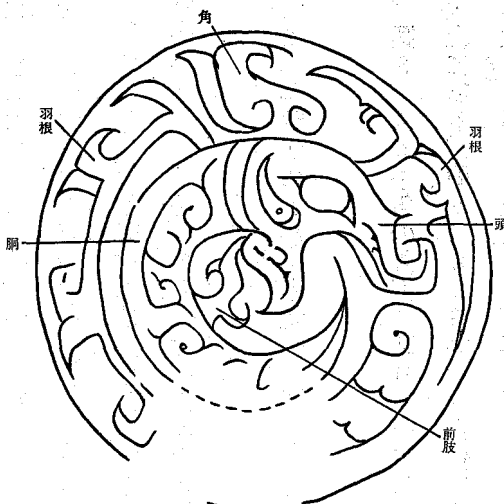


圖3 鳳を象つた圖像，簋外底拓本より，西周 IIB

圖1の1、2の文字はいずれも固有名詞として使はれる文字であるが、それらから夫々點線で書いた要素をとり除いたものが鳳である。これらは從來そのやうに讀まれてゐるが、確かに同圖で角、頭とした所は篆文の旨に、胸とした所は篆文の凡に變化して行つた原の形と考へられる。圖2は丸まつた龍の一種を象つた玉製品であるが、その表現の特徴から西周中期のものと知られる。圖1の鳳字とこの玉製品とを比べてみると、角、頭等々と書き込んだ部分が夫々對應し、丸まつた身體全體の特徴も共通してゐる。さうすると、圖2の玉器は同時代に鳳字に象られてをり、從つて鳳といふものを表はしたものであつたことが知られる。

同じ鳳は圖3の青銅器上の圖像にも見られる。西周 IIB の簋の底の外側に鑄出されたものである。圖2で胸に貼りついてゐた前肢は圖1、1のやうに前に伸され、圖2でコンパクトな形に表はされてゐた羽根は、圖2では背から離れ、鉤状



の突起の多く出てゐる點、圖1、2に近い形をもつてゐる。圖3では角の後面に一ひら刀形の附加物がつく。圖1の羸字ではこの附加的な羽根はないが、羸字でム字形に表はされた角は殷から西周時代にかけて饗餮や龍の類によく見るもので、別に論ずるごとく、<sup>(5)</sup> 羚牛 (*Budorcas Taxicolor Hodgson*) の角を原型とするものと考へられる。簡略のために牛角と呼ぶことにする。この牛角も、圖4の西周中期の例では枝の出た羽根が一枚後面に貼りついてゐる。圖3のものはその羽根が幅廣くなつたものである。

以上により、西周時代に牛角を載いた龍形の神で、羸と呼ばれるもののあつたことが明かにされたと考へる。

次にこの羸の圖像がどう變つて行つたか、資料の飛石傳ひにたどつてみよう。圖3、4で牛角の外側に貼りついてゐた羽根は、また同じ西周Ⅱに牛角と合體し、牛角の曲り角から小枝が出たやうな表現に變る。圖5、6のS字形に身體をうねらせた龍に見るごとくである。この先の尖つた小枝の出た形は、西周Ⅲから春秋Ⅰに<sup>(6)</sup> 極く普通に見る、圖7、8のやうなぶつきら棒な形の枝のついた形に變る。

圖9は春秋ⅡBの簠から採つた。圖7の角を横に傾け、根本の曲りを強くした形と見ればよい。圖10も同時期の例。角には上の曲り角の他、角が頭から出外れる所にも下向の枝が加はる。圖11も同時期のものであるが、角からは更に多くの小枝が出てゐる。この時期のごてごてした繁縷趣味の產物と言へよう。これは壺の耳であるが、前、後肢を持つた細長い身體を持つてゐる。この頭が西周時代と同様、龍の類のものであると考へられてゐたことが知られる。

圖12は春秋ⅢAの盤の把手の飾り。ゆるく波狀にうねつた角からは小枝がなくなつてゐる。圖13は春秋ⅢBに間間ある大きな饗餮風の頭である。S字形にうねつて鱗をもつ大きな角があり、額にトランプのスペード形のものがつく。この時期のこの式の大きな饗餮風の頭はこのものを着けるのが通例である。前六世紀頃には殷乃至西周の紋様が青銅器上に現れ、



圖4 牛角の鑿養紋，觚形尊，西周II，Dr. Arthur M. Sackler collection



圖5 牛角S字形龍，匱侯孟，西周II，凌源海島營子村出土



圖6 牛角S字形龍，師趯鬲，西周II，故宮博物院



圖7 小枝付牛角犧首，馬具飾，西周III，濬縣辛村出土



圖8 小枝付牛角犧首，號季氏子組簋，春秋I，Victoria and Albert Museum

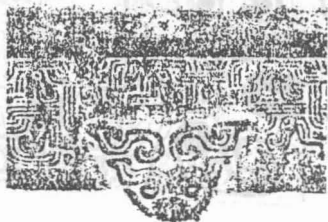


圖9 小枝付牛角犧首，簋，春秋ⅡB，輝縣琉璃閣出土



圖10 小枝付牛角犧首，鑑，春秋ⅡB，白鶴美術館藏



圖11 小枝付牛角犧首，壺，春秋ⅡB，新鄭出土

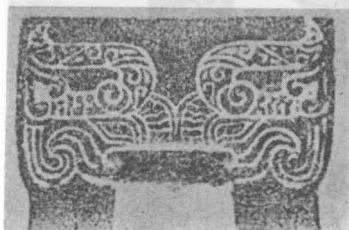


圖12 牛角犧首，盤，春秋ⅢA，唐山賈各莊出土



圖13 牛角犧首，鑄，春秋ⅢB，The Museum of Asiatic Art, State Museum, Amsterdam



圖14 牛角犧首，飾金具，春秋ⅢB，  
淮南蔡家崗趙家孤堆出土



圖15 牛角犧首，鑄，前5世紀後半頃，The Cleaveland Museum of Art



圖16 牛角獸鑲，壺，前5世紀後半～前4世紀前半頃



圖17 牛角獸鑲，壺，前5世紀後半～前4世紀前半頃，輝縣出土



圖18 牛角犧首，甬氏鐘，前5世紀末頃，泉屋博古館

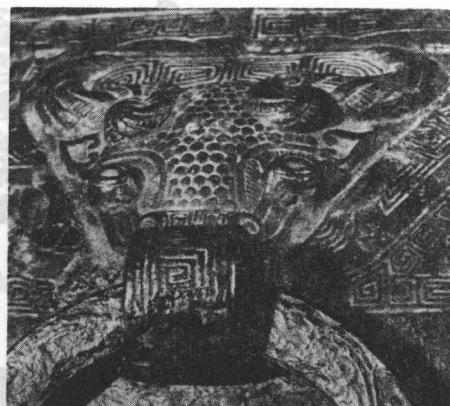


圖19 牛角獸鑲，壺，前4世紀前半頃，臺北，國立故宮博物院



圖20 牛角獸鑲，壺，前4世紀前半頃，藤井有鄰館



圖21 牛角獸鑲，壺，前4世紀後半頃，The British Museum



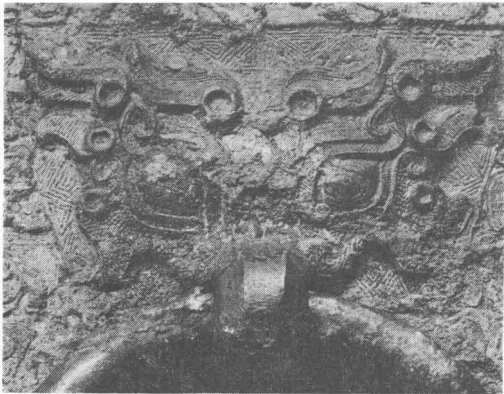


圖22 牛角獸鑲，疊，前3世紀前半頃，東京國立博物館



圖23 牛角獸鑲，銅，前漢中期，滿城2號墓出土



圖24 牛角獸鑲，孟，永初元年（107），黑川古文化研究所

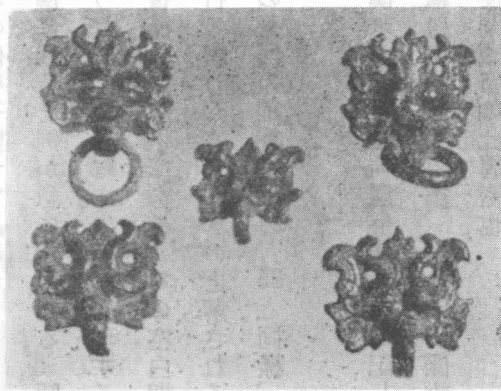


圖25 牛角鋪首，後漢晚期，孟津送莊出土



圖26 牛角鋪首，密縣打虎亭1號墓，江村治樹氏攝

復古の風の興つたことが察せられる。この額のスベード形も、殷、西周の饕餮の額の篋形の復活と見られる。圖14は羽渦紋的表現の例。同時期のものである。頭の上、兩隅に同じ形の角が羽渦紋風に表はされ、額の中央に同じく羽渦紋化したスベード形が識別できる。圖15は圖13と近いが、表現から前五世紀後半に降ることが知られる。下顎の横に前肢が表はされてゐる。

圖16は前五世紀後半から四世紀前半頃の壺の獸鑲。額にスベード形をつける。圖17は同時期の羽渦紋化した表現の例。圖18は銘に前四〇四年の事件を記した虜氏鐘<sup>(1)</sup>の鼓の部分の紋様。額に大ぶりの弓字形のものを對ひ合せたものがある。圖13、15にあつた同様な身體部分に對應するものである。この身體部分については(9)節でまた觸れる。

圖19、20は前四世紀前半頃、圖21は同後半頃の壺の例。別に説明することもあるまい。圖22は前三世紀前半頃の疊の例。羽渦紋的表現の圖17、21のやうなものの傳統を襲つてゐる。

角らしい形の角をもつた獸鑲は前漢に入ると例が急に少くなる。圖23は前漢中頃、滿城出土の銅の例である。我々の目に觸れる器物で、今まで見てきたやうなS字形をなす牛角が出現するのは後漢後半になつてからである。圖24は永初元年(一〇七)銘のある壺の例、圖25は後漢晩期の例である。この空白期には、同じ牛角でも第(4)節に記す別系統のものが流行してゐる。牛角の類の表現にも流行り廢りがあつたものと解される。

圖26は後漢晩期の密縣打虎亭漢墓の墓門の鋪首。圖24、25と同様、S字形の角をもつ。額の横に前肢がある。前肢のつく例は圖15に見た所である。

さて門の鋪首の由來については後漢末の應劭が『風俗通義』に記してゐる話がある。

門戶鋪首。謹案、百家書云、公輸般之水上、見蠡、謂之曰、開汝匣、見汝形、蠡適出頭、般以足畫圖之、蠡引閉其戶、終不可得開、般遂施之門戶、欲使閉藏當如此周密也

と、即ち

門戸の鋪首。謹んで案ずるに、百家書に云ふ。公輸般水上にゆき、蠡を見る。これに謂ひて曰く、汝の匣を開き、汝の形を見せ、と。蠡適ま頭を出す。般足をもつてこれを畫圖す。蠡その戸を引閉し、終に開くを得べからず。般遂にこれを門戸に施す。閉藏すること當に此のごとく周密ならしめんと欲するなりといふのである。この蠡は勿論ただのタニシではなく、タニシを原型とした水神である。

この節の最初に蠡といふ文字に對應する西周中期の圖像として、牛角を載いた龍の類をとり上げて示した。春秋戰國を通じてその圖像の系統をたどり、圖26の鋪首に到達した。この圖像は西周の蠡（蠡）の後裔である。應劭が後漢代の門戸の鋪首は蠡といふ神の圖像だといふのは、この手のものを指して言つたに相違ない。この一見他愛ない故事來歴が、西周以來續いた傳統の裏づけを持つものであつたことが知られたのである。

圖26の密縣の鋪首は、更に後の時代まで傳統がたどられる。圖27は圖像の表現からみて南朝の晚い時期のものと知られる鄧縣學莊彩色畫像塋墓の墓門頂部に飾られた例。大きくうねつた太い眉、先の圓まつたS字形の角は圖26の傳統に屬する。基部が筒狀になつた馬の耳のやうな耳は圖24に見る所である。これと同様な大きな齒並びの獸首は龍門十四洞左壁の龕の横額にある（圖28）。六世紀の最初の三分の一の頃のものとされる。北魏から北齊頃には同じく太い眉、S字形にうねつた角、馬の耳のやうな耳を持つ金銅製の鋪首が多く知られる。圖29は大同南郊窖藏出土の北魏とされる例。圖30は定縣出土の北齊とされる例である。額の中央にパルメットが立つ。圖24の額に見る、何か植物のやうな表現の身體部分から變化したものに相違ない。植物狀の形は圖28の額にも別な形で表はされてゐる。

圖31は趙州安濟橋の隋代の石欄に彫られたものである。表裏同紋で、橋の中央に當る所に使はれたものである。この神像に再びS字形にうねる角、太い眉、馬の耳のやうな形の大きな耳が見出されよう。これまで見て來たのと同系のもので



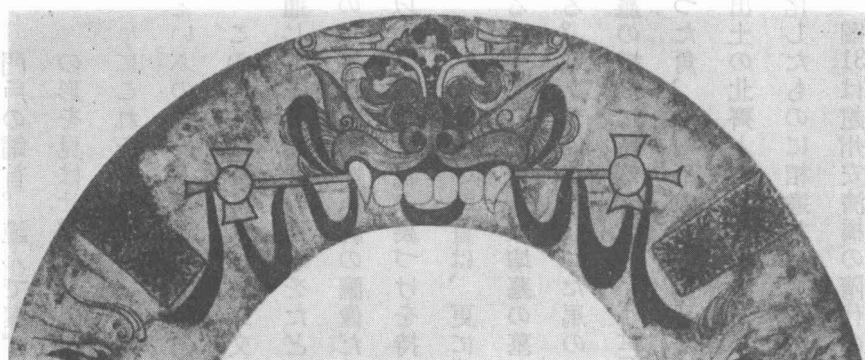


圖27 牛角鋪首，鄧縣學莊彩色畫像塋墓，南朝晚期



圖28 牛角鋪首，龍門14洞西壁，6世紀前期

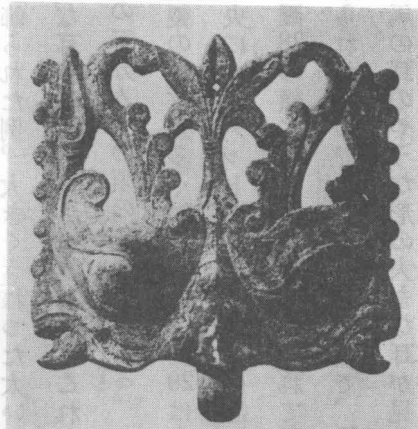


圖29 牛角鋪首，北魏，大同南郊窖藏

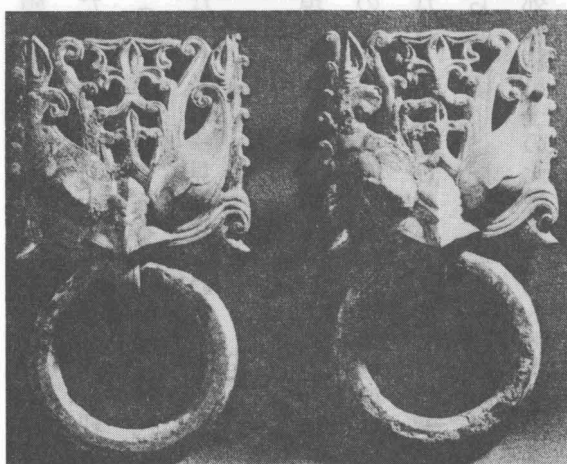


圖30 牛角鋪首，北齊，定縣



圖31 牛角鋪首，趙州安濟橋，隋

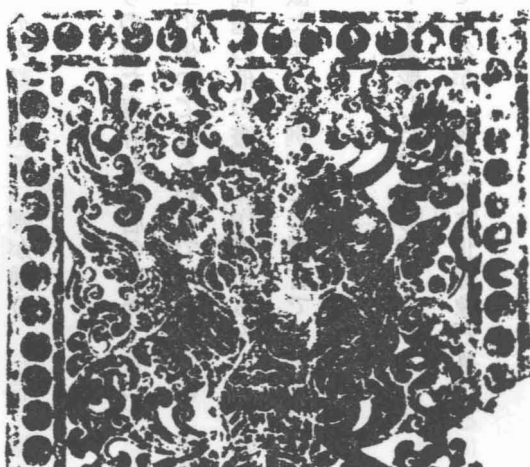


圖32 牛角鋪首，道因法師碑碑側，龍朔三年（663）西安碑林

の系統に屬することも偶然とは考へられない。水神は橋の欄干に彫られるにふさはしい。<sup>10)</sup>

なほ他に、圖24、29、30のやうに額に植物狀のものの立つもので時代の降る圖像として圖32の西安碑林中の道因法師碑碑側頂部の例が挙げられる。龍朔三年（六六三）の年紀をもつ。目の兩脇から出る馬の耳のやうな耳、長毛の逆立つた眉、基部に小枝が出た内彎する角、そしてその中央に立つ植物狀のもの。植物狀のものの中央は角張つて菱形に尖り、兩側の枝は長く伸びてその横を覆つてゐる。

あることは疑ひない。この神像の彫られた横長のスペースの下邊をみると、神像の廣い口の左右に、幅のあるコンマ狀の線が何層にも重なつてゐる。水しぶきを表はすものに相違ない。すると、この醜惡な顔をした圖像は水神で、水中から頭を出した所、乃至は水中に沈まうとしてゐる所を表はしたものである。この圖像が、圖26の、水神である蠡を象つたものだと傳へられる鋪首

圖29、30に見たやうな、太い肩、馬の耳のやうな耳、蕨のやうな角をもつた獸鑲・鋪首の中には、額にパルメット等の植物状のものが立つもの以外に、またそこに佛像その他の鬼神の乗る類が少くない。圖33は交脚菩薩が乗る例。この菩薩には手が四本あり、二本は膝に置き、他の二本は鋪首の角をしつかり握んでゐる。圖34に乗るのは肉髻がある所から佛と見られる。圖35も相近い例である。全體の表現が圖29、30と同様である所から年代も同じと考へられる。これらでは、圖33他で蕨形の角であつた部分が龍に變化してゐる。圖34では佛は兩龍の後肢の上に立ち、35では佛は對ひ合つた龍の口から出た舌の上に腰を掛けるといふ趣向である。また34、35とも一對の龍の後肢の一方と尾がパルメット形の輪廓を形造つてゐる。<sup>①</sup>

なほ、鋪首狀の獸首の上に佛が乗る構圖は遙かに降り、唐末の歷城神通寺、朗公塔にも見出される(圖36)。佛龕の拱額の上の尖りに大きな獸首が噛みつき、その額の上には佛が乗り、左右に脇侍を伴つてゐる。これも右に見たやうな類の晚い後裔と見られよう。

次に圖37を見るに、頭に三つの尖りの出た鬼神が蹲居の姿勢で乗つてゐる。兩手は圖33のやうに鋪首の角を握む。尻はパルメットの尖りと接するが、その上に坐つてゐるわけではあるまい。同様な頭を持ち、同じ蹲居の姿勢をとる鬼神は圖39の常州出土の畫像磚に見られる。同墓の他の畫像の作風からみて、南朝の晚い時期のものと考へられる。この磚の圖像は上膊から羽毛が出てゐる。圖38も似たやうな例。この鋪首では角が龍に變つてゐる。圖37のものと手の姿勢、頭の形に相違がある。

圖40では鋪首の額の上にパルメットを鑿彫したT字形が立ち、上には一對の鳥がとまる。鳥は體を向ひ合せ、首をふり向けてゐる。この例では鳥が小ぶりであるが、漢代の陝北畫像石墓などに見る、鋪首の上に鳳凰を配した圖柄を思ひ起させる。



圖33 菩薩の乗る牛角鋪首，6世紀

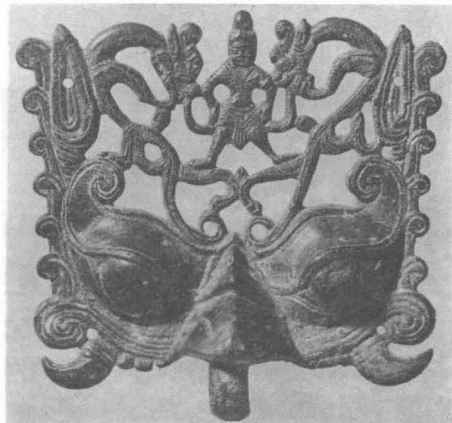


圖34 佛の乗る牛角鋪首，6世紀

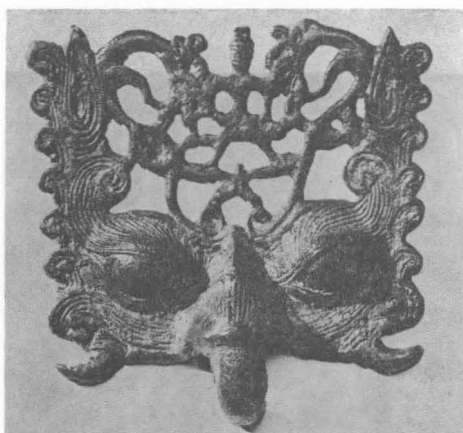


圖35 佛の乗る牛角鋪首，6世紀，Victoria and Albert Museum



圖36 佛の乗る牛角鋪首，唐末期，歷城，神通寺朗公塔



圖37 鬼神の乗る鋪首，6世紀，出光美術館

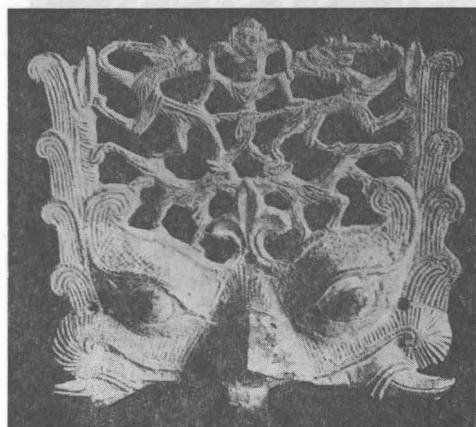


圖38 鬼神の乗る鋪首，6世紀

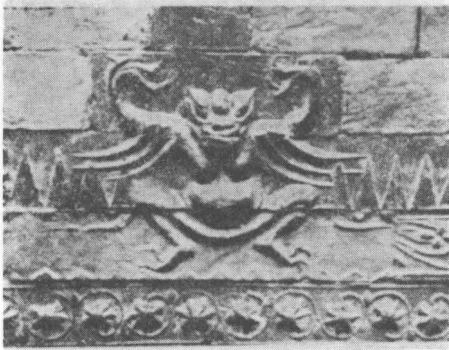


圖39 頭に三つの尖りの出る鬼神，塢，南朝晚期，常州南郊出土

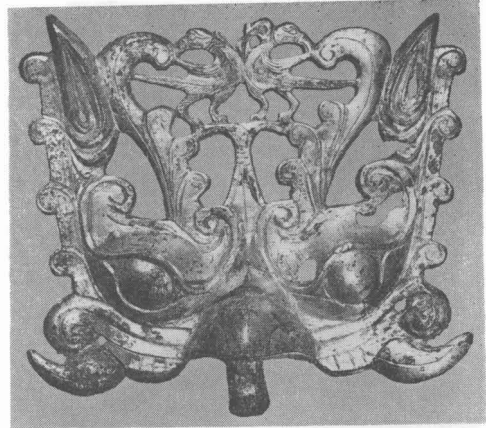


圖40 鳥の乗る牛角鋪首，6世紀，出光美術館蔵



圖41 上方に鳥の居る牛角鋪首，6世紀中頃，鍍金畫像石棺，Minneapolis Institute of Arts



圖42 寶珠の乗る鋪首，太原，婁叔（570年歿）墓



圖41は六世紀中頃とされる鍍金孝子傳畫像石棺に彫られた獸鑲の刻線畫である。同時代でも圖33—38、40等は青銅の金具であるため形に制約があつたのと異なり、この方は畫像であるため線がのびのびしてゐる。ここにも一對の鳥が頭の上方に表はされるが、蓮華座の上に乗つてゐる。その下には蓮瓣の中につぼみの蓮華を加へた圖像が表はされる。圖42は五七〇年歿の婁叔の墓の墓門上の畫像。圖41で蓮瓣の中にあつた蓮華のつぼみは、ここでは寶珠となつてゐる。

右に見たやうな獸鑲の額の上に加へられた各種の圖像は、下の獸形神に對してどういふ意味を持つものと考へられたであらうか。この問題を考へる上に参考となるので、先に次の事實に注意しておかう。それは、圖34ほかのやうに、角が龍に變化してゐる現象及び大きな鬼神の頭上に他の鬼神が乗るといふ構造である。

先づ前者。圖43は同じ時期の同遺跡出土の圖7の角の先に龍頭をつけた形である。圖7にある角の曲り角の小枝も圖43に見出すことができる。圖33の獸鑲は圖7の後裔であるが、圖7と43、圖33と35は何とよく對應してゐることであらうか。これは到底偶然とは思はれない。圖43から降つて、同様な角の龍に變化した例は春秋Ⅱ頃の圖44、春秋ⅡBの圖45、春秋ⅢAの46、同ⅢBの圖48など、春秋時代にはつづいて傳統がたどられる。圖47の燕下都のものは戰國時代の例である。圖49では蛇のやうな頭をもつた俯視形の龍になつてをり、今まで見て來た側視形とは違ひがあるが、これも同じ線上にあるものと言へよう。これは滿城一號墓の棺の附屬品であるから、前漢中期のものである。これ以後前引北魏の例まで途中の例證が見當らないが、ここまで來れば圖34等のやうな角の龍化を西周以來の傳統と見ることさほど無理ではなからう。

次に後者。圖50、51のやうに西周前期から中期にかけて、饕餮の額に立つ筮形飾の上部に犧首をつける例を時に見かける。圖52は降つて西周後期の簋の鑿のものである。渦卷眉の犧首の額に、その小型のものが附いてゐる。この時期の例は今の所他に思ひつかないが。圖53は春秋ⅡBの盤の耳の上面の紋様である。ここでも大きな犧首の額に別の小型のものが附いてゐる。圖49は前記のごとく滿城一號墓の例。龍に化した角の間に牛角形（次節に記す形の方）の角を持った顔が入つ



圖43 角が龍になつた犧首，馬具，西周Ⅲ，濬縣辛村出土



圖44 角が龍になつた犧首，甗，春秋Ⅱ，信陽平橋出土



圖45 角が龍になつた犧首，鼎，春秋ⅡB

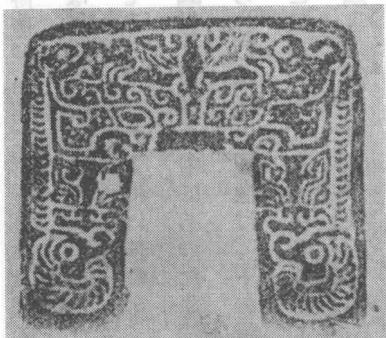


圖46 角が龍になつた犧首，盤，春秋ⅢA，唐山賈各莊出土



圖47 角が龍になつた犧首，半瓦當，戰國，易縣燕下都出土



圖48 角が龍になつた獸鐙，春秋ⅢB，輝縣琉璃閣出土



圖49 角が龍になつた鋪首，前漢中期，滿域1號墓出土

てゐる。このやうな、何百年も続く中國の傳統の連續を見てくると、圖33以下の獸鑲の額に別の鬼神が加はつてゐるのも、同じ傳統に則つた古い表現方式を襲つたものと見る方が自然な見方ではあるまいか。

圖50、51の饗養と犧首の關係について考へてみるに、最初に引いた論文で論證したやうに饗養は上帝の圖像で、天上にある強力な鬼神であり、犧首はそれより一段格の低い鬼神で、地上的、肉體的な下帝であつたと考へられる。これらの圖像上の饗養と犧首の關係は從つて、優勢な天帝が、その役割の補完者として小者の下帝を伴つて青銅器上に出現してゐる、

獸鑲・鋪首の若干をめぐつて



圖50 額に犧首のつく饗養，簋，西周 I，藤井有鄰館，樋口隆康氏攝



圖51 額に犧首のつく饗養，觚形尊，西周 II，The University Museum, University of Pennsylvania，樋口隆康氏攝



圖52 額に犧首のつく犧首，簋，西周 III，The Museum of Asiatic Art, State Museum, Amsterdam

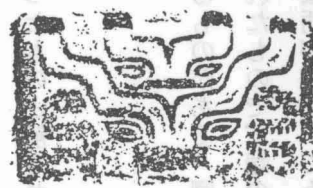


圖53 額に犧首のつく犧首，盤，春秋 IIB，洛陽中州路出土



と解されるであらう。この場合、表はされた圖像の大小をもつて格の上下が表はされてゐるのであるが、上帝と下帝とは同類の關係にあるのである。

漢以後の、大きな獸鑲・鋪首の上に小さく別の鬼神ないし象徴的な圖柄が加へられるのも、恐らく同様、主要な、有力な鬼神に、それと性格において通ずる所があり、その超自然的な能力を補完する、格の下る鬼神が加へられたもの、と解してよいのではないかと考へられる。佛や菩薩は、この金具の製作者、使用者にとつて殷周以來つづいて來た中國傳統の鬼神と比べれば、格の落ちる小者の鬼神と考へられたに相違ない。大きな頭の上に小さく扱はれてゐるからである。なほこれら頭上に加へられた鬼神が、下の大きな牛角鬼神と對抗ないし敵對する性格の者でないことは、表はされた姿勢から明白である。

圖40について、さきに漢代畫像石墓の門戸の鋪首とその上に表はされた鳳凰を想起した。漢代のこの方式の圖像が、鑿<sup>ウ</sup>帝とその侍者、使者の鳳凰のコンビといふ殷以來の傳統を襲ふものであることは、先の鑿<sup>ウ</sup>帝の論文で明かにした所である。この解釋も、右に記した牛角の鬼神とその上に小さく表はされた佛、菩薩、或いは蹲居する鬼神との關係についての先の解釋と矛盾しない。圖41の蓮華、圖42の寶珠といった佛教的なシンボルも、その下の鋪首の超自然的な働きを助けるものとして加へられたと解釋するのが穩當と考へられる。それらが同時代にどのやうな力をもつたものと解されてゐたかについて詳細な解説を行ふことは私の任ではないが。

右に引いたのと同じ類の牛角鋪首で頭上に他の圖像が加はつたものとして、もう一つ、山の載るものがある。圖56がそれである。細身の角は圖41と近い。大體同じ頃のものと考えられる。石床の中央の足の上に彫られたもので、端のはね上る太い眉をもつた鋪首の上に、細身の牛角が立ち、間にどう見ても重疊する山嶽としか見えない圖柄が挟まつてゐる。同

じ時代の石床の同様な位置に刻まれた類例として圖57、58のやうなものがある。かういふ例を見れば、圖55の獸鏤で角の間に立つ三角形も山嶽と考へられる。圖54は額につく三角が一つであるが、これも圖55同様縦に筋が入り、同じ表現である。この二つは圖29、30など六世紀のものと表現が異なり、角もしつかりしてゐる。何時のものか明かでないが、時代的に遡るものと考へられる。圖59は五八二年歿の隋の李和の石棺の畫像から採つた。頭上に並ぶ山形の間に二本の棒が立つてゐる。圖24の角との比較によつてこれを角と見得れば、これも同類である。

圖55、56と同様、頭上に山と見られるものを戴くが、牛角を缺くものがある。圖60がそれである。太く長い眉の間に山が並ぶ。頭の圓い山であるが、圖55のものやうに縦に筋が入つてゐる。周圍のパルメットの形からみて六世紀前半頃のものと見られる。圖62、63は夫々雲岡第七洞および第八洞の佛龕の帷の裝飾である。前者は頭上の山が三つ、後者は一つで、圖54、55に對應するものと言へよう。山には圖56のやうな方式で線が入られてゐる。このやうな幾何學的な形を頭上に戴いた鬼神の全身像は、先に圖37、38で牛角鋪首の上に乗つてゐたのを見た。當時の人人が圖62、63の頭を見たら、このやうな鬼神の頭だとすぐわかつたはずである。

このやうな山形を頭上に戴せた鬼神は時代を遡り、永嘉五年（三一三）銘の塼の出た福建閩侯關口橋頭山二號墓の畫像塼に例がある（圖61）。頭の兩側に脰を張つた前肢が見える。上を平らに切つた卵形の顔に三角形の尖りの出たこのやうな表現は、漢代に類例が見出される（圖119）。その類から由來したものと考へられる。

圖64は手をさし上げて蹲居する神で、石棺の足側の面に大きく扱はれてゐる。頭上には木の生えた山嶽が浮き、足の下にも山がある。目の兩側から腹まで、そうめんを連想させるやうな平行線が垂れてゐる。顔の側面、下顎から出るのは鬚であるが、目の上からも出てゐる。これは長い眉毛としか見様がない。圖55、56、60など今まで見て來た例では、長くて太い眉毛は横に張り、末端がはね上つてゐたのであるが、これは同じ眉毛を下に垂れた形で表はしたのである。腕からは

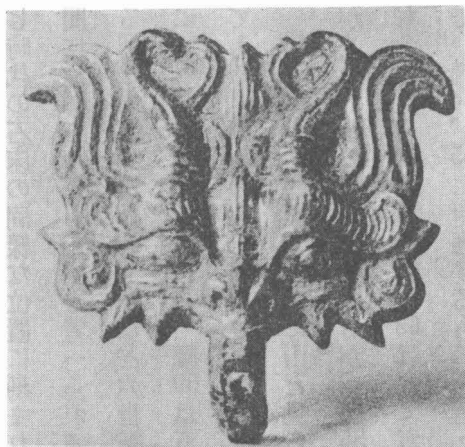


圖54 頭上に山の乗る牛角獸鏤，4～5世紀頃



圖55 頭上に山の乗る牛角獸鏤，4～5世紀頃，東京，個人藏



圖56 頭上に山の乗る牛角鋪首，石床，6世紀中期，Museum Rietberg



圖57 頭上に山の乗る牛角鋪首，石床，6世紀中頃，Asian Art Museum of San Francisco, Arery Brundage Collection

長い羽毛の束が外に向いて出てゐる。この羽毛の束は圖39にも見る所である。この例では頭上の山嶽が果してこの鬼神の頭に戴るものとして意識されたものか、或いは足の下に山嶽と同様、遠景として畫かれたものか明かでない。然し圖65を見れば、これは前者の方に解すべきであることが明らかとなる。この圖像は北魏正光五年（五二四）銘の元昭墓誌の蓋の上面の紋様である。この方は姿勢が動的で、眉と鬚も右方になびき、腕から出る羽毛の束も波打つてゐる。然しこれが圖64と同じ對象を畫いたものであることは疑ひない。この例では然



圖58 頭上に山の乗る牛角鋪首，石床，6世紀中頃，磁縣七垣村出土



圖59 頭上に山の乗る牛角犧首，隋李和（682歿）墓石棺



圖60 頭上に山の乗る無角鋪首，石枕，6世紀前半頃，京都大學文學部博物館



圖61 頭上に山の乗る無角犧首，墓磚，永嘉五年（313），閭侯關口橋頭山出土



圖62 頭上に山の乗る無角鋪首，雲岡第7洞主室北壁，6世紀後期

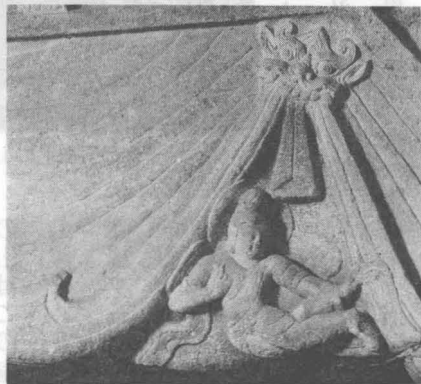


圖63 頭上に山の乗る無角鋪首，雲岡第8洞主室北壁，6世紀後期



圖64 頭上に山の乗る畏獸，鍍金畫像石棺，6世紀中期，Minneapolis Institute of Arts



圖65 頭上に山の乗る畏獸，元昭墓誌蓋，正光五年（524）

以上を要約すると次のごとくになる。即ち、牛角をもつた鋪首の中には角の間に明かに山を伴ふものがあり（圖56）、一方同じ鋪首でも頭上に尖りの立つ角なしの小鬼神を同じ部分に伴ふものがあるが（圖37、38）、この小鬼神は圖64、65のやうに明かに山神と知られる表現のものと同じ鬼神と知られるのである。即ちこれら牛角鋪首は、角の間に山を描いてそれが山嶽神の性格のものであることを示してもよいし、角の間に山の代りに山嶽神を小さく入れてその性格を示してもよか

し、木の生えた山嶽はこの動物の頭の上に密着し、有機的な身體の一部として描かれてゐる。すると、圖64の頭上の山は、この動物に加へられたもので、足の下

の山はこの鬼神が山神であることを強調するために描き加へられてゐるのだと解されよう。

つた、といふことが知られたことになる。先に角の間に佛その他の圖像を入れる例について、その遠い祖先である圖50、51のやうな例——饕餮Ⅱ上帝と犧首Ⅱ下帝——から、類推でそれを解釋したが、同時代の圖像の解釋によつて、ここにその傍證を得ることができたと考へる。

なほ、圖64、65のやうな圖像——大きな頭を持ち、頭や腕に長い羽毛の束の生えた、裸に近い姿で人立する想像上の動物——は畏獸と呼ばれ、その性格について研究が行はれてゐる。<sup>17)</sup>ここに扱つた山嶽神の他にも、獸饕・鋪首と關聯するものが出てくるので、最後の(11)節にまとめて筆者の考へを述べることにする。

### (3) 別類の牛角つきの獸饕・鋪首

別類の牛角とは、前節に見たのが殷、西周前期の饕餮、犧首の牛角から變化して西周後期に小枝つきの細身の形に變つたものの系統であるに對し、小枝つきに變る前の古い形を存した類である。古い形とは圖4に見るやうな、おもだかの葉の先を曲げた、とでも言ふやうな、幅のある葉狀の形のことである。この形は圖66の春秋ⅡBの鏤の篆間の龍の頭に見られ、また圖67の前五世紀後半頃の鼎の紋様にも、西周中期と殆んど變らない形で殘存してゐる。

右に引いたのは平面的表現の例であるが、前五世紀前半頃の丸彫の形では圖68のやうな獸饕が出てくる。額にトランプのスピード形の飾りがあり、その兩側に今問題の形の牛角がつく。この形の角をもつ獸饕・鋪首はこれ以後、漢時代まで頗る多い。時代順に例を引くと次のごとくである。

圖69、70は前四世紀前半頃の壺の獸饕、圖71は同世紀後半頃の壺のもの、圖72はよく知られる中山王響の長文銘のある鈐の例。前四世紀末のものである。圖73は前三世紀前半頃の楨のもの、圖74も同時期の壺の例、圖75も同時期の長頸壺に





圖66 葉狀牛角の龍，鑑，春秋 IIB，新鄭出土



圖67 葉狀牛角の龍，鼎，前 5 世紀後半頃



圖68 葉狀牛角の獸鑑，前 5 世紀前半頃，  
長治分水嶺出土



圖69 葉狀牛角の獸鑑，壺，前 4 世紀前半頃



圖70 葉狀牛角獸鐙，壺，前4世紀前半頃



圖71 葉狀牛角獸鐙，壺，前4世紀後半頃，出光美術館

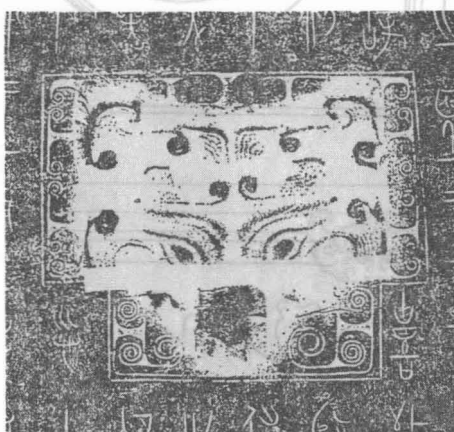


圖72 葉狀牛角獸鐙，鈚，前4世紀末頃，平山1號墓



圖73 葉狀牛角獸鐙，榼，前3世紀前半頃



圖74 葉狀牛角獸鐙，壺，前3世紀前半頃，臺北，國立故宮博物院



圖75 葉狀牛角獸鐙，長頸壺，前4世紀頃



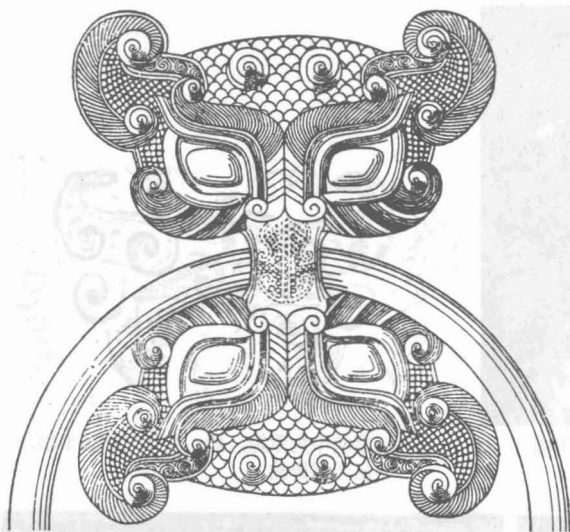


圖76 葉狀牛角鋪首，戰國，長沙伍家嶺出土

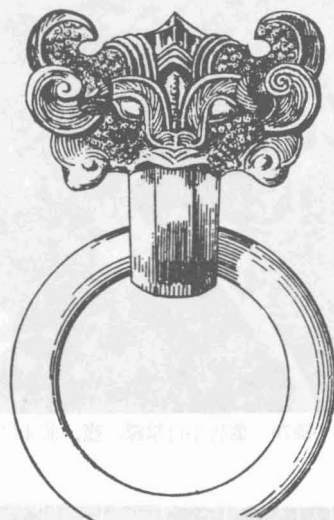


圖77 葉狀牛角の獸鐶，壺，前漢前期，廣州出土



圖78 葉狀牛角獸鐶，鈐，前漢中期，太原太堡出土

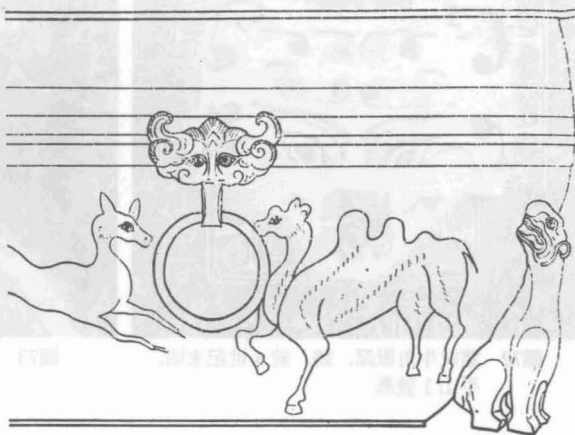


圖79 葉狀牛角獸鐶，尊，河平3年（前25）銘，右玉出土



圖80 葉狀牛角の獸鐶，陶壺，前漢晚期，洛陽燒溝出土

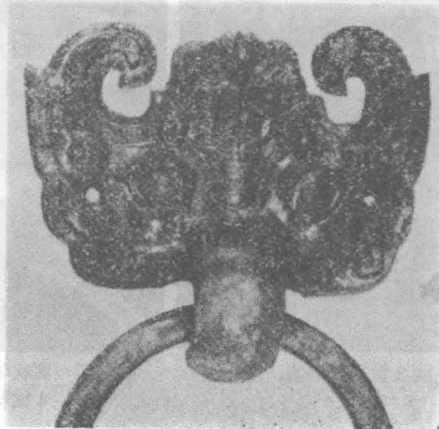


圖81 葉狀牛角の獸鐶，前漢中期，銅山小龜山出土



圖82 葉狀牛角の獸鐶，壺，永光3年（前41），平壤太同江面出土



圖83 葉狀牛角獸鐶，後漢中期，定縣北莊出土

つけられたものである。圖76は長沙出土の戰國とされる鋪首。漢代に多い、角の周圍にケバ状の線の加へられる類の早い例である。圖77は廣州出土、前漢前期の例、圖79は右玉出土の同時期の鈐の例、圖78は河平三年（前二五）銘の尊、圖80は前漢晩期の土器の壺である。

前漢中期から後漢前期頃まで、角の外側に狭い葉状のものが貼りついた形が流行する。圖81は前漢中期墓出土のもの、圖82は永光三年（前四一）の年紀のある孝文廟鍾のもの、圖83は紀元九〇年に歿した中山王劉焉のものと推定される定縣北莊大墓出土の例である。外側に葉状のものが貼りつく所は、西周中期、圖4のやうなものを聯想させるが、關係があるかどうかについては明かにし難い。この節に引いた系統は後漢の前期頃までしか傳統がたどられないが、それはここで斷絶したわけではなく、流行が第(2)節の類に變つて行つたと解すべきこと、前節に觸れた通りである。

#### (4) 牛角つきの獸鐶（角の扁平化した類）

前四—三世紀の「火」紋に特色のある壺——出土地の知られるものでは楚の領域出土のものが多い——に圖84、85のやうな類が多く使はれる。前節では圖72、74のやうに角の立ち上りの少いものがあつたが、これはそれを更に扁平化



圖84 葉狀牛角（扁平化）獸鏤，鈐，前4世紀後半頃



圖85 葉狀牛角（扁平化）獸鏤，壺，前3世紀前半頃，Museo Nazionale d'Arte Orientale



圖86 葉狀牛角（扁平化）獸鏤，壺，前漢中期，滿城2號墓出土



圖87 葉狀牛角的獸鏤，鈐，戰國

したものとも見ることが出来る。ただ、内側の方に段がつく所に獨特の癖が認められる。前節の牛角を扁平化したヴァリエーションと認めて見出しの如く名づけた。圖86のごとく前漢中期まで見られる。

戰國の鈐によく見るもので、長方形に近い逆梯形にまとめられた羽渦紋的表現の獸鏤に、圖87のやうなものがある。上邊中央五分ノ三程を占めるのはスぺード形を扁平にデフォルメしたものであるが、その兩側につくものは兩端がややね上る。牛角形の變形かどうか確かでないが、例が少くないので假にここに分類しておく。

# (5) 渦卷眉の獸鏤・鋪首

渦卷眉とは、圖89の雙身蛇の頭に見る



圖88 渦卷眉犧首，簋，西周Ⅲ，Museum of Asiatic Art, State Museum, Amsterdam



圖89 渦卷眉の雙身蛇，壺，西周Ⅲ，臺北，國立故宮博物院



圖90 渦卷眉の犧首，壺，春秋ⅡA，湖北省博物館，樋口隆康氏攝

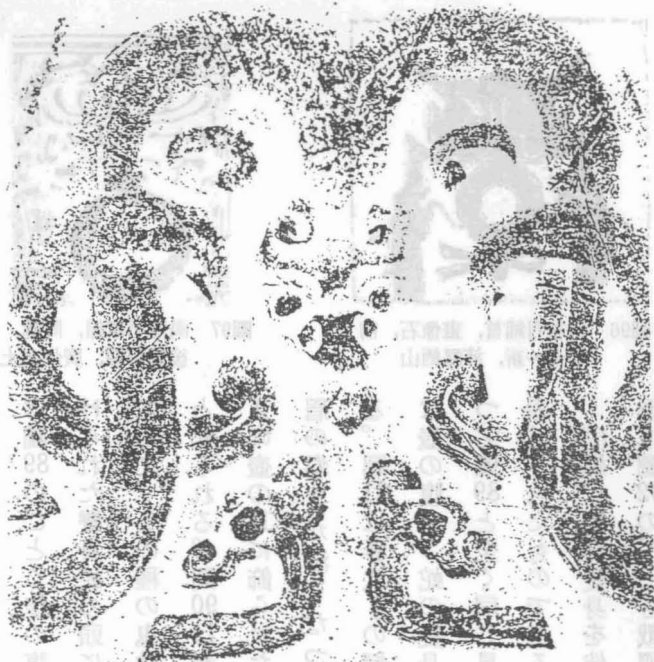


圖91 渦卷眉の雙身蛇，壺，春秋Ⅱ，輝縣琉璃閣出土

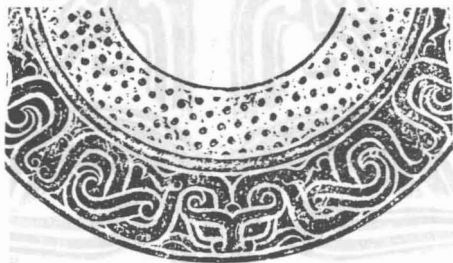


圖92 渦卷眉の雙身蛇，璧，戰國，曲阜出土



圖93 渦卷眉の獸鏤，壺，前3世紀頃

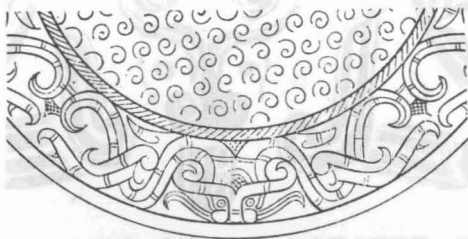


圖94 渦卷眉の雙身蛇，璧，前漢中期，滿城1號墓出土

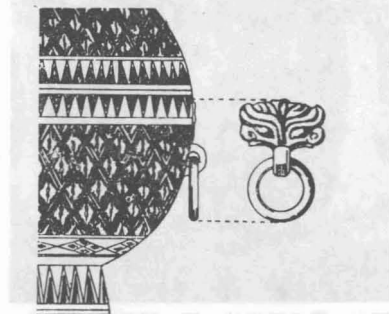


圖95 渦卷眉獸鏤，盒，前漢後期，廣州出土



圖96 渦卷眉鋪首，畫像石，前漢末～新，沛縣泗山



圖97 渦卷眉獸鏤，陶尊，後漢前期，廣州出土



圖98 渦卷眉獸鏤，陶器，後漢後期，廣州出土

やうに、眉の外端が頭上で渦卷狀になつたもの。殷後期の早い時期から出てくるものである。圖88は西周Ⅲの簋の頸に犧首の形で使はれたものであるが、同じ頭は圖89のごとく壺の腹につけられた雙身蛇の頭になつてゐて、この種の鬼神の頭と知られる。圖90は春秋ⅡAの壺の耳に飾られた例。眉の卷きが浅くなつてゐる。圖91は春秋Ⅱの擬古的な壺の腹に、蛇の雙身を伴つて圖89と全く同じ具合に表はされたものである。同様、蛇の雙身を伴つた形は圖92のごとき戰國時代

の壁に残る。眉の卷きは浅い。眉の中間に扇形があるのは、圖93の前三世紀の壺の獸環に見るとき、スペード形の飾りに相當するものである。この式の紋様は同時代の壁に例が多く、また他の種の玉器にも類例が見出される<sup>18</sup>。この手の壁の紋様は漢代まで多く使はれてゐる。圖94は滿城漢墓出土の例である<sup>19</sup>。

これら戰國の遺物に見るとき、眉の渦卷のほどこた形のもは漢代の獸環・鋪首にも見出される。圖95は廣州漢墓、前漢後期の例。額の飾りが菊の花弁狀になつてゐる。圖96は江蘇沛縣の畫像石墓の鋪首。前漢末から新のものとなる。眉の反りは更に淺くなつてゐる。圖97、98は廣州漢墓の陶製明器の例。夫々後漢前期、同後期とされる。中央のスペード形の兩側に、菊の花弁狀に立ち上るのは眉の毛と解される。

#### (6) 外反尖葉形葉狀部分つきの獸環・鋪首

外反尖葉形葉狀部分とは、前節の渦卷眉のヴァリエーションで、眉の外端の渦卷の上邊に尖りが出來て葉狀になつたもの、及びその部分が獨立の身體部分と看做され、耳のやうな具合に表はされた類を指す。

圖99は伴出物および紋様の様式から春秋ⅡB頃とみられる匱の注口上部の紋様。眉の外端の渦卷が尖つた葉狀に形造られる。圖100は紋様の様式から春秋ⅢA頃と見られる鐘の鼓の紋様。圖99と同様な眉を持つ。圖101は前五世紀前半頃の提梁壺の轡首。葉狀の部分の比率が大きくなつてゐる。圖102は前五世紀後半の鑄の鈕。外向に首をねぢ向けた動物の頭に問題の形の眉がある。この類で羊角をつけた類があり、(9)節に引くが、同時期の同じ動物で、圖102と同じ眉をもつもの(圖144)と並んで、圖141のやうに、細かい平行線で毛を表はした渦卷狀の渦をつけて表はされる類が見出され、ここにとり上げた類を渦卷眉のヴァリエーションと看做した先の見方の正當であることが證される。





圖99 尖葉形部分つき犧首，匱，春秋  
II B，侯馬上馬村出土

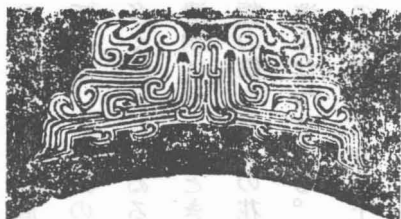


圖100 尖葉形部分つき犧首，鐘，春  
秋 III A，長治分水嶺出土



圖101 外反尖葉形部分つき犧首，揭梁壺，  
前 5 世紀前半頃，National Gallery  
of Victoria 松丸道雄氏撮

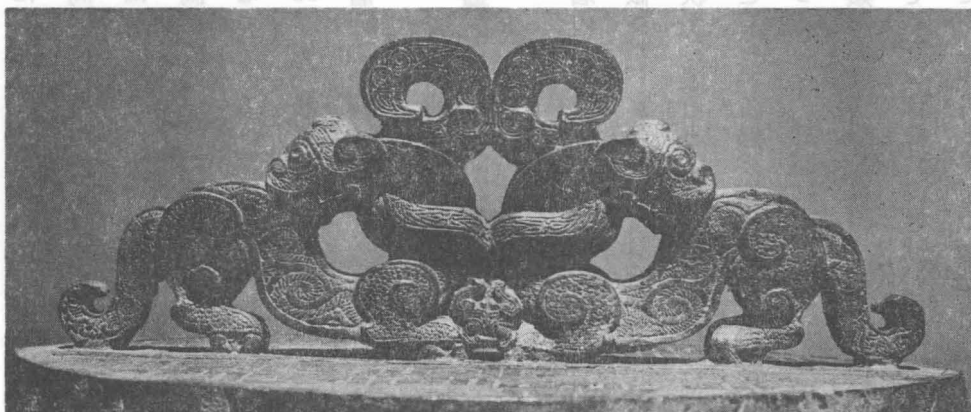


圖102 外反尖葉形部分つき犧首，罇，前 5 世紀後半頃，Asian Art Museum  
of San Francisco, Avery Brundage Collection, 樋口隆康氏撮



圖103 外反尖葉形部分つき獸鐶，壺，前 4  
世紀後半頃，臺北，國立故宮博物院



圖104 尖葉形部分つき獸鐶，鈇，前 4 世紀後半  
頃，出光美術館

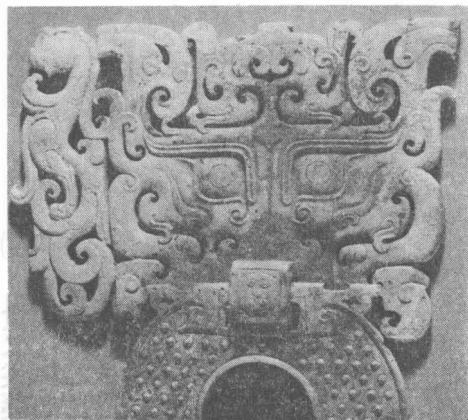


圖105 外反尖葉形部分つき獸鑲，前漢中期，廣州南越王墓出土



圖106 外反尖葉形部分つき獸鑲，漆尊，前漢中期，滿城1號墓出土

圖像の系統から言つて、外反尖葉眉の頭が渦卷眉の頭から出自したと言つても、前者は肩に渦卷狀のものをつけた、胴の長い四足獸ないし龍の身體と共に表はされ、後者は雙つに岐れた蛇の身體と共に表はされ、戰國頃には兩者は明かに異なつた種類と考へられてゐたことは明かであり、兩者が神格としてどういふ關係にあつたかについては、今の所十分明かにし難い。

この式の獸鑲は、前四世紀前半頃の圖103のやうに、戰國時代になると尖端の葉狀の部分と眉が別の身體部分として扱はれるやうになつてくる。圖147のやうに羊角を伴ふ類についても同様なことが觀察される。圖104は前四世紀後半頃の鈐の例。圖100の系統のものである。額や耳の兩側にくねつた龍を配するが、この龍の使ひ方は圖には引いてないが前六世紀後半頃の鐘に見るもので、その時分のものを復古的に仿つたことがうかがはれる。圖105は第二代南越王胡（元朔（前一二三—一二二）—元狩（前一二二—一二一）の間に歿）のものとされる墓から出土した玉製獸鑲である。圖103に見た眉の端の葉形は外向けに大きく反り、細身に表はされてゐる。圖106は滿城漢墓出土の前漢中期の例。眉の端の反りは更に強く外反りになつてゐる。この類で漢代に多くなるのは、次節に引くヴァリエーションである。



(7) 外反尖葉形葉狀部分つきの獸鑲・鋪首（長い型）

前節の類とこの類との一番見分け易い區別は、前者の葉狀部分の獨立した類では、その基部の渦卷が内側末端に一つあるだけであるに對し、この項のものは兩端に二つの渦卷があることである。この葉狀部分が全體に縦長に形造られる所から、「長い型」といふ呼稱で區別した。

圖107は器の型式から前五世紀後半頃と知られる壺の獸鑲。毛の線を刻んだ弓なりの眉の終る所から葉狀のものが立ち上り、上部外端は圖103と同様な形になる。この例では毛を刻んだ眉と葉狀の部分が截然と分けて表はされてゐるが、圖108では一つながりになつてゐる。これは遊離した獸鑲であるが、これと近い表現の圖109は、器の型式から前三世紀前半頃と知られる。圖108、109は外反する葉狀の部分が、前節のものやうに卷いた眉の先端のごとくに見えると同時に、そこから内側に巻き込んだ部分があつて、第(5)節の渦卷眉の形が残存してゐるとも見うる。同時代の製作者は恐らく第(5)節の類と(6)節の類とをこのやうな形で合體したのではないかと解される。

圖110は前漢中期、滿城一號墓の鳥篆壺の獸鑲。眉の外端が強く外に張り出してゐる。圖111は前漢中期の墓から出土した壺の獸鑲であるが、葉狀の部分は曲りの少い簡潔な線で表はされ、大きな面積をとつてゐる。これ以後この形のものが流行つてゆくやうである。

圖112は前にも引いた紀元九〇年歿の中山王劉焉のものと推定される定縣北莊漢墓の獸鑲。圖113は平壤九號墳出土の奩の獸鑲であるが、廣州後漢後期墓の出土品に極めて近い。圖114は後一七四年歿の劉暢のものとされる定縣四三號墓出土の獸鑲。これらでは眉と、その外側の葉狀の部分とは一つながりにならず、別の身體部分と意識されてゐたやうである。



圖107 外反尖葉形部分つき獸鑲（長い型），  
壺，前5世紀後半頃



圖108 外反尖葉形部分つき獸鑲（長い型），戰國，  
Courtesy of the Freer Gallery of Art,  
Smithsonian Institution, Washington D. C.

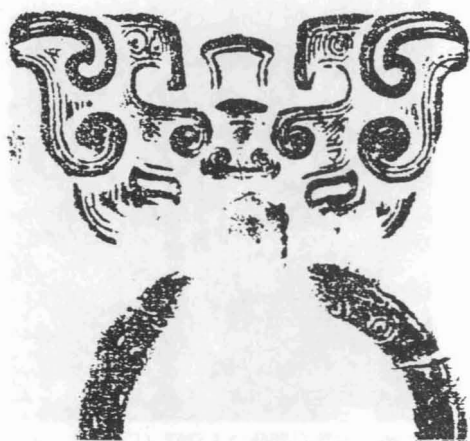


圖109 外反尖葉形部分つき獸鑲（長い型），壺，  
前3世紀前半頃，臺北，國立故宮博物院

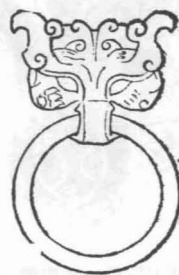


圖110 外反尖葉形部分つき獸鑲（長い型），  
壺，前漢中期，滿城1號墓出土



圖111 外反尖葉形部分つき獸鑲（長い型），  
壺，前漢中期，太原太堡出土

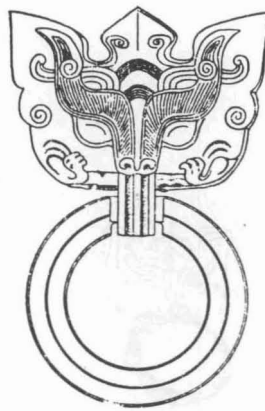


圖112 外反尖葉形部分つき獸鑲（長い型），  
後漢中期，定縣北莊出土



圖113 外反尖葉形部分つき獸鐸（長い型），盃，  
後漢後期，平壤大同江面9號墳出土

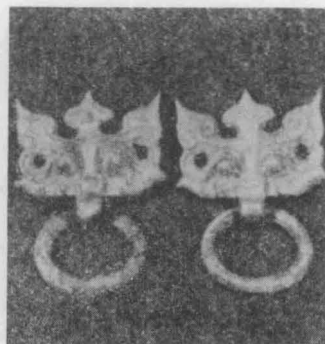


圖114 外反尖葉形部分つき獸鐸（長い型），  
後漢後期，定縣北陵頭村出土



圖115 外反尖葉形部分つき獸鐸（長い型），盃，  
後漢後期



圖116 外反尖葉形部分つき獸鐸（長い型），盂，  
永元三年（92），黑川古文化研究所



圖117 外反尖葉形部分つき獸鐸（長い型），  
陶器，後漢前期，廣州出土

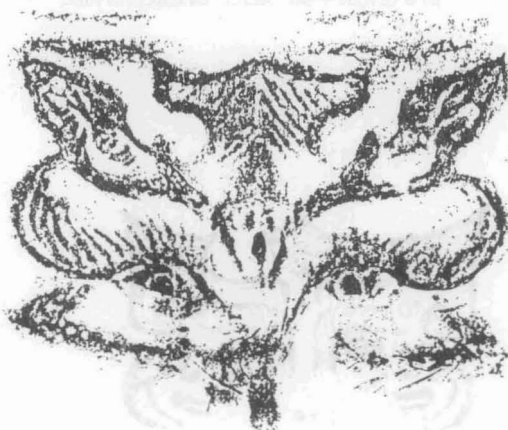


圖118 耳つきの獸鐸，盂，章和2年（79），黑川古  
文化研究所

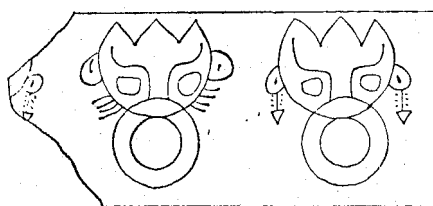


圖119 男女の獸鐙，畫像石，後漢，連雲港市錦屏山出土

圖115は壺の獸鐙である。眉は端が大きく巻いてをり、その外に葉狀のものが加はる。このような形は圖108、109にも見た所である。表現は圖113に近く、年代も近いものと思はれるが、この時代でもこの式の獸鐙が渦卷眉を持つものであることが記憶されてゐたことが知られる。

圖116ではまた毛の長い眉が葉狀の部分の中、深くにまで入り込み、圖115とはまた別の形で、葉狀の部分が眉の一部であることの記憶の存続を證してゐる。これは永元三年（九二）銘の孟の獸鐙である。圖117は廣州出土の後漢前期の土器。同様、眉が葉狀の部分に入り込んでゐる例である。圖118は章和二年（七九）銘の孟の獸鐙。長い毛の生えた大きな彎曲した眉を持つが、その上に別に馬の耳のやうな耳がつく。耳の外形は圖117の葉狀の部分と近い。葉狀のものは眉の一部ではなく、耳である意識されることもあつたことが知られる。

圖119は後漢畫像石墓の石刻。やはり彎曲した長い眉が葉狀の部分に入り込む例であるが、ここに引いたのは男女一對の形で表はされた珍しい例としてである。即ち、耳飾りを垂れたものとそれがなく鬚をもつものが交互になつてゐる。この類の中に女性のものがあると考へられてゐたことが知られる。

前漢末から後漢中頃、葉狀の部分が極端に發達した類が見られる。圖120は眉が葉狀の部分に入り込んだ類であるが、葉形の先端はかなり張り出してゐる。洛陽の後漢初とされる墓から出た壺の獸鐙である。畫像石ではこの部分が更に大げさになったものがある。圖121は鄭州の畫像石墓の鋪首で、後漢早期とされる。圖122は同じ時期の唐河の畫像石墓の鋪首。このやうに葉狀部分が冑の鍬形のやうな形になり、額にトランプのスペード形のものをつけた鋪首は、前漢末から後漢前期にかけて南陽地方に頗る多い。圖123は方城の後漢中期の例。葉狀の部分が複雑な形をとる。圖125は徐州の後漢末の例であ

る。圖124の徐州の例は詳細な年代的位は不明であるが、大體後漢前期頃のものと思はれる。葉狀の部分ばかりでなく額の飾りも大きい。口の兩側に前肢があり、上膊から羽毛が立ち上つてゐる。



圖120 尖葉形部分の發達した獸鏤，  
陶壺，後漢初，洛陽澗濱出土



圖121 尖葉形部分の發達した鋪首，  
畫像石，後漢早期，鄭州出土



圖122 尖葉形部分の發達した鋪首，畫  
像石，唐河針織廠出土



圖123 尖葉形部分の發達した鋪首，畫  
像石，後漢中期，方城東關出土

(5)―(7)節のものに近い類で、眉間ないし額から長い毛、或いは高い髻と見られるものが立つ類がある。圖126は始建國四年(二二)銘のある壺の獸環である。太く卷いた眉の間に三重になつた山形のものが立つ。顔の下邊には前肢が表はされてゐる。顔の左右に沿つて斜線を刻した二重の縁どりのやうなものがあるのは、圖124、127と比較すると、前肢の上膊から出る羽毛と知られる。このやうな位置に前肢を伴ふ獸環・鋪首は各型式のものに間聞あるものである。圖127はよく知られる渠縣の沈府君石闕、左闕前面に圓彫で表はされた例。卷いた太い眉は圖126と共通する。眉間からよく見るスぺード形を何枚も重ねた形のものが立つ所に特色がある。眉の上には圖118と同様な形の耳がある。口の横には爪をむいた前肢がある。頭の左右に立つのは、圖124の鋪首の前肢の上膊から立ち上る羽毛と同じものに相違ない。圖128は沂南畫像石墓の例。一重であるが頭上に細い線を入れた高い山形が立ち、前肢の上膊から後頭にかけて長い羽毛が逆立つてゐる。眉は人間並みで

獸環・鋪首の若干をめぐつて

# (8) 渦卷眉の獸環・鋪首(額に長毛)



圖124 尖葉形部分の發達した鋪首、畫像石、後漢前期頃、  
雕寧舊朱集九女墩出土



圖125 尖葉形部分の發達した鋪首、畫像石、後漢末期、  
徐州青山泉白集出土





圖126 渦卷眉長毛の獸鑠，壺，始建國4年（12）



圖127 渦卷眉長毛の幟首，渠縣沈府君石闕，後漢



圖128 長毛の幟首，畫像石，沂南出土



圖129 渦卷眉高髻の鬼神首，鏡，4世紀，江田船山古墳出土

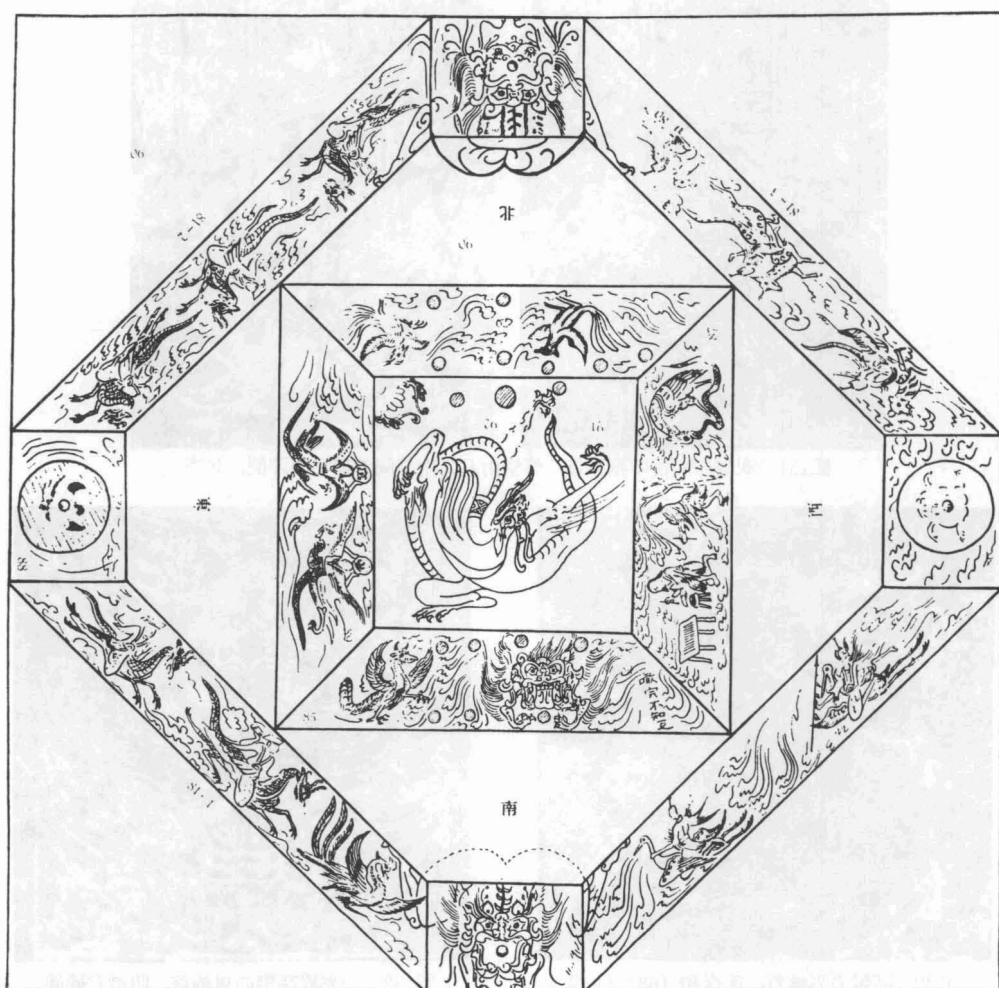


圖130 高句麗古墳天井の神話的世界と高髻鬼神首，輯安四神塚

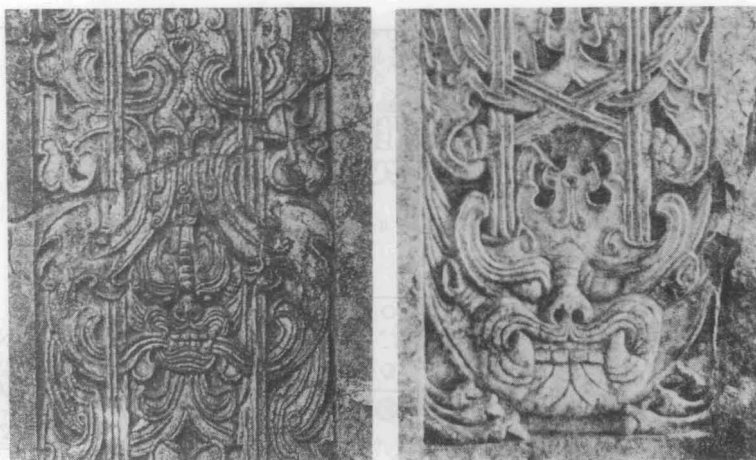


圖131 渦卷眉高髻の鬼神首，響堂山石窟南洞洞外無字碑碑側，北齊

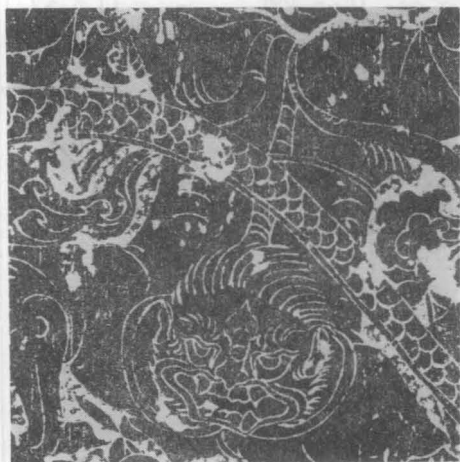


圖132 高髻の鬼神首，隋李和（682歿）墓石棺



圖133 渦卷眉高髻の鬼神首，明徵君碑碑側，上元三年（676），南京棲霞寺



圖134 高髻の鬼神首，龍門奉先寺神王像，7世紀中期

あるが、これも同類と見られようか。

圖129は江田船山古墳出土の畫紋帶同向式神獸鏡の例。四世紀のもの<sup>(2)</sup>とされる。この鏡は上方(同圖上)に右に向いた神の坐像があり、その下で交叉する紐狀の雲氣のやうな帶に圍まれて問題の頭が表はされる。その左右にはこの頭に向ふ侍者とも見られる坐像がある。これの下方、鈕を隔ててこれと對應する位置(同圖下)に右に向つた坐像があり、その下方に蛇の絡んだ龜、即ち玄武の像がある。するとこの位置は北方天上に當り、玄武の上方に居るのは北方に配された神に相違ない。然らばこれと對稱の位置にある坐像は南方に配された神で、その下方の問題の頭も南方天上に居る神といふことになる。問題の頭は太い彎曲した眉をもち、頭上に饅頭を重ねたやうな形の高い髻ともいふべきものをつけ、大きく口を開いて牙を露してゐる。この像は圖126、127のごとき鬼神と同類と見られる。問題の圖像が四世紀頃、南方天上界にゐると信ぜられた神の像であることが知られたことになる。

同様な神像で圖129のやうに天上世界に配せられた例は圖130に引いた高句麗の壁畫墓に見出される。圖は輯安四神塚の三角持送り天井に畫かれた神話的世界を畫いた壁畫の見取圖で、圖に記入された方角は墓の方向である。東西の日月の圖から九〇度回轉した位置に問題の神像(同圖下)がある。日は東、月は西と夫々當時の觀念で本來的な方角に畫かれることから推して、問題の神像も南および北の天上世界に棲む神と信ぜられたことは疑ひない。

これらの神は口を大きく開き、頭上に臺のやうなものを立て、前肢をつく。前肢の上膊から長い羽毛が立ち上ること、圖126、127、128と同様である。ただ長い眉が見えず、代りに目立つた大きな耳を持つ。耳の上方に斜め上に向ふ短線が並ぶのは耳の毛らしい。この像は例へば圖107・113のやうに眉から變化した大きな耳をつける類と見ることができよう。

なほ相似た神像は同じ天井の一段上方、南方に畫かれてゐるが、この神は頭上に高く突出した毛髪ないし髻と見るべきものを持たないため、ここには論じない。

この四神塚の年代であるが、畫風が中國式である所から中國の例と比較してみるに、この墓に畫かれたパルメントは、例へば東魏武定元年（五四三）銘の碑像下部、蓮のつぼみの左右に彫られたものと極めて近い形をもつ。大體六世紀中期のものと見て差支へないのではないかと思はれる。

圖131左は響堂山石窟の南洞洞外の北齊無字碑の碑例の一部であるが、ここにも頭上に饅頭を重ねたやうな形の高い髻をもつた鬼神像が見られる。この像は長いね上つた眉を持つ。髻の先端には更に飾りがついてゐる。圖132は開皇二年（五八二）歿の李和の石棺側面の畫像。問題の頭は龍の後肢と尾の間に畫かれる。これの向ふ側には虎、棺の頭の側には鳳凰、足の側には玄武が刻まれるから、四面で四神が揃ひ、この側の龍は青龍である。この頭から節の澤山ついた長い髻が出、龍の尾の更に上方へと延びてゐる。四神は四方の星座の神であり、勿論天上世界に棲む。問題の神像はここでも天上世界の神神に仲間入りしてゐるのである。

圖131とよく似た像は南京棲霞寺の明徵君碑（上元三年、六七〇）の碑側にもある（圖133）、同様な高い髻、はね上つた長い眉が見られる。眉間のすぐ上の山形の重なりは圖126、スピード形を重ねた形は圖127以來の傳統によるものと見られよう。相近い表現は龍門奉先寺の神王像の着る鎧にも表はされてゐる（圖134）。この方は髻がさう高くなく、眉は極めて幅廣く表はされてゐる所に小異があるが、同類と認める上には妨げになるまい。この寺は咸亨二年—上元二年（六七二—五）の造營とされる。

以上により、ここにとり上げた類が六朝時代に天上に棲む鬼神の仲間と考へられたこと、その圖像が唐代にまで生き續けてゐたことが知られたと考へる。

## (9) 羊角の獸鐙

殷後期から西周前期、先の尖ったC字形の羊角形の角を戴いた饕餮や犧首は頗る多い。西周後期には鼎の足の上部の飾りとして残存する。額に窠形飾をつけるもの(圖135)とそれのないもの(圖136)が並存する。同様な犧首は例へば圖137に見るごとく、春秋Ⅰにも同様な形で存続する。次の時期の資料としては圖138、139のごとき春秋ⅡBの鼎の足の上部につけられた例がある。全體として西周Ⅲの傳統を存したものであるが、大げさな眉の表現には時代の特徴が見られる。圖139の眉は先端が尖った葉狀になつてをり、(6)節の圖99、100と共通する。その式の犧首に羊角を加へたもの、といふ意識である。この表現型式は次の時代に引きつがれてゆくことになる。他にこの時期には圖140のやうにC字形の角から小枝の出た表現も見られる。

羊角の獸鐙で數の多いのは前五世紀頃である。圖141は器形から前五世紀前半頃と知られる壺の耳である。頭を自分の背の方にふり向け、龍的な細長い身體に前肢と後肢がある。眉は長く伸びて外端は巻き上り、(5)節の渦卷眉であるが、その上方をC字形の羊角がとり巻いてゐる。長い舌を垂れる。圖142も同時期の鑑の例である。同様なC字形の羊角をつけた動物であるが、耳の端は(6)節の圖103のやうに眉の先が尖った葉形に變つてゐる。

圖143も同時期の鑑の例であるが、額のx字形の突出の左右から紐狀の身體部分が眉の上邊に沿つて左右に岐れ、角の下をくぐつて後x字形の突出の上部に收斂してゐる。この紐狀の身體部分からは所所小枝が岐れ出る。この身體部分を形の類似によつて假に錢苔狀部分と呼んでおく。

圖144は前五世紀後半の鑄。鈕には圖141と同様な動物が使はれてゐる。身體は圖141よりも細長く、龍的である。眉の先は





圖135 羊角の鬚鬘，斚从鼎，西周Ⅲ，黑川古文化研究所，樋口隆康氏撮



圖136 羊角の犧首，小克鼎，西周Ⅲ，藤井有鄰館



圖137 羊角の犧首，匜，春秋Ⅰ，藤井有鄰館

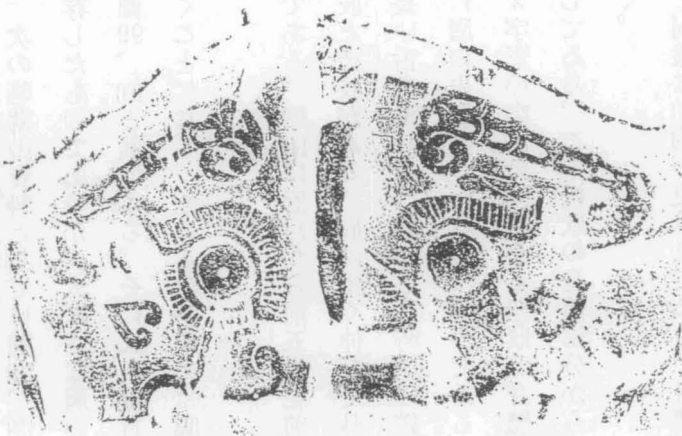


圖138 羊角の犧首，鼎，春秋ⅡB，輝縣琉璃閣出土



圖139 羊角の犧首，鼎，春秋ⅡB，輝縣琉璃閣出土



圖140 羊角の犧首，鑑，春秋ⅡB，侯馬上馬村出土



圖141 羊角の獸鑲，壺，前5世紀前半頃，  
藤井有鄰館，樋口隆康氏撮

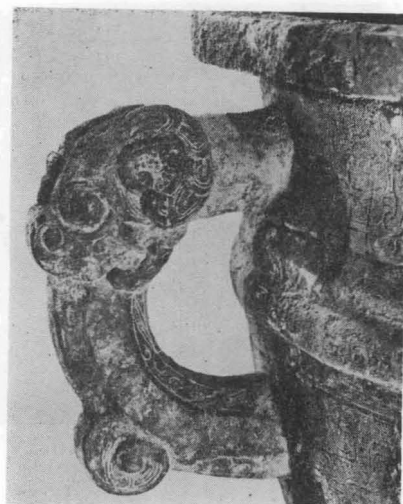


圖142 羊角の獸鑲，鑑，前5世紀前半頃，  
天理參考館



圖143 羊角の獸鑲，鑑，前5世紀前半頃，  
輝縣山彪鎮出土

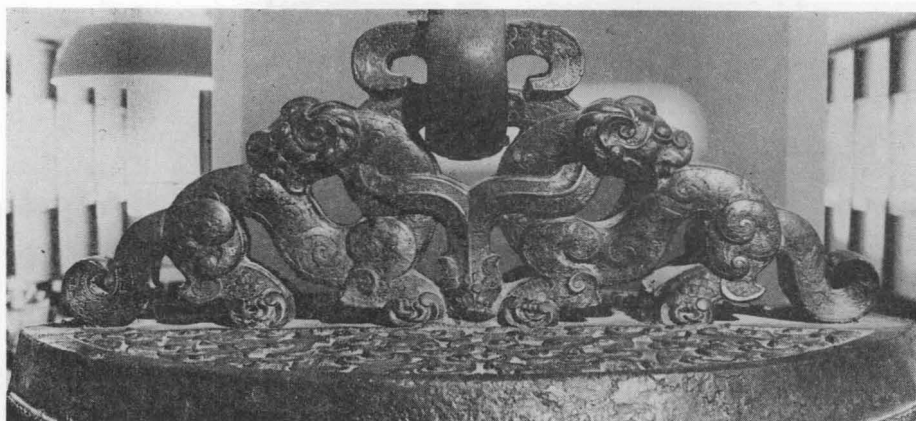


圖144 羊角の轡首，罍，前5世紀後半頃，Museum of Far Eastern Antiquities, Stockholm



圖145 羊角の獸鑑，鑑，前5世紀後半頃，根津美術館，樋口隆康氏撮



圖146 羊角の獸鑑，鑑，前5世紀後半頃，長治分水嶺出土



圖147 羊角の獸鑑，鑑，前5世紀後半～前4世紀前半頃，From: Eleanor von Erdberg, *Chinese Bronzes from the Collection of Chester Dale and Dolly Carter*, No.16, With Kind permission of Aribust Asiae



圖148 羊角の獸鑑，短頸壺，前4世紀前半頃，Asian Art Museum of San Francisco, Avery Brundage Collection, 樋口隆康氏撮



圖149 羊角の獸鑑，鉞，前3世紀前半頃，臺北，國立故宮博物院

圖142のやうに葉狀になつてゐる。圖145は同時期の、頭上に錢苔狀部分をつける類。圖146も同類であるが、錢苔狀部分の上端は外反りとなり、枝岐れが少い所に特色がある。圖147は大體前五世紀後半から四世紀前半頃の甗に使はれた例。圖148は紋様から大體前四世紀前半頃と判斷される短頸壺の例。眉の先が大げさに巻き、その外を羊角がとり巻いてゐる。

圖149は紋様から大體前三世紀前半頃と判定される鈐の例。圖147と近い形が保たれて

獸鐙・鋪首の若干をめぐつて



圖150 羊角の獸鐙，鈐，前3世紀前半頃



圖151 羊角の鋪首，前3世紀後半頃，咸陽宮址出土

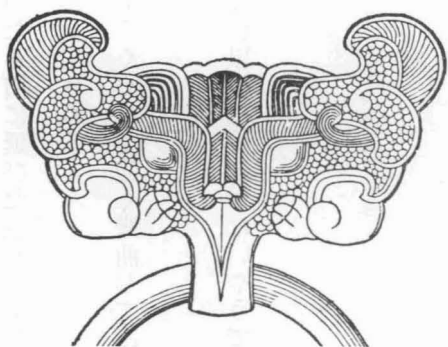


圖152 羊角の獸鐙，前漢後期，長沙徐家灣出土



圖153 羊角の獸鐙，壺，後漢初期，洛陽澗濱出土

る。圖150も紋様から同時期と判断される鈐の獸環である。圖149もさうであつたが、角が平たく横に延びた感じである。角に鱗はないが同類としてよからう。この形の獸環はこれと相近い型式の鈐に類例が幾つか見出される。

圖151は咸陽宮址出土の秦の鋪首。角と同方向に髷の入った角が、眉の先端の葉狀部分の下をくぐつて強く彎曲してゐる。圖152は長沙出土の前漢後期の鋪首。やや小ぶりであるが圖151と同様な髷の入った角が見える。

圖153は洛陽出土の後漢初期の例。ここにも同様な角が見出される。羊角の獸環・鋪首はこれ以後には續かないやうである。

#### (10) 錢苔狀部分つき獸環

前節の例へば圖143から羊角を除去し、頭上に錢苔狀部分だけを殘した、といった形の獸環が前五—四世紀に見出される。ぎこちない名稱であるが、見出しのごとく呼んでおく。

圖154は紋様から前五世紀後半頃と知られる甬の例、圖155は器形から前四世紀前半頃と判定される壺の例である。圖156は簋のものである。紋様の細線表現からみて、前四世紀頃のものと思われよう。圖157は手の込んだ玉製帶鉤に刻された例。細工から戰國末頃のものと思はれる。頭上につく錢苔狀部分は、内向きの巻きがほどけたやうな形に表はされてゐる。

圖157は錢苔狀部分に枝が一つしかなくつたが、圖158—160は枝が全くなつてゐる類。先に圖18にも見たものである。枝はなくても一旦外に向つた後内に向い、次いで上方に曲る、といふ原則は圖155など枝の出た類と同様であるから、ここに一緒に扱つた。圖158は前五世紀後半、圖159の伴出物も同じ時代である。圖158は一對の蛇身を持ち、渦卷眉の龍の頸にその身體を巻きつけてゐる。圖160の玉器では中央部に問題の獸頭がある。これも春秋末から戰國の前半位まで、と言へば大





圖154 錢苔狀部分つき獸鏤，甬，前5世紀後半頃，松岡美術館



圖155 錢苔狀部分つき獸鏤，壺，前4世紀前半頃，The British Museum

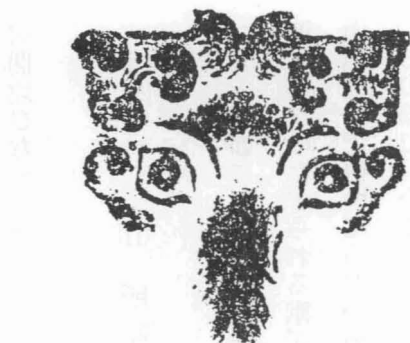


圖156 錢苔狀部分つき獸鏤，簋，前4世紀頃，淳化城關公社出土



圖157 錢苔狀部分つき轆首，玉帶鉤，戰國末頃

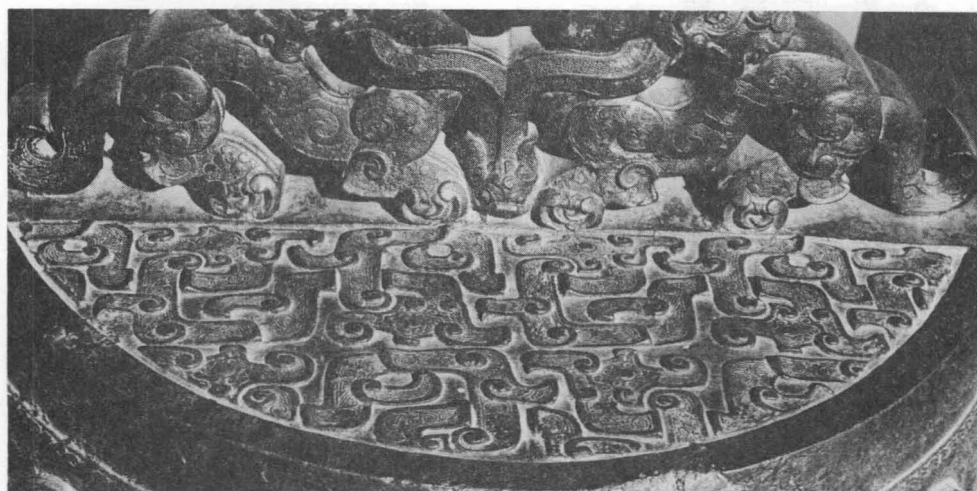


圖158 錢苔狀部分つき轆首，鑄，前5世紀後半頃，Museum of Far Eastern Antiquities



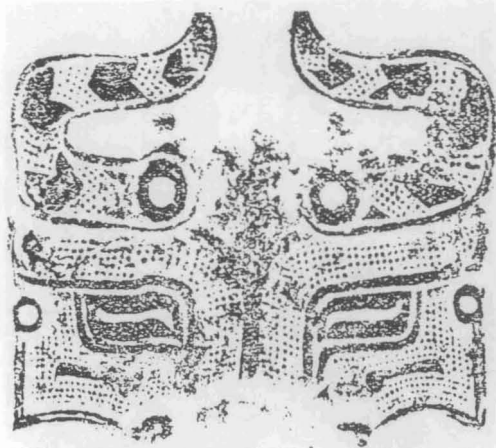


圖159 錢苔狀部分つき獸鏡，前5世紀後半頃，  
輝縣琉璃閣出土



圖160 錢苔狀部分つき幟首，玉飾，前5～  
4世紀頃

體間違ひなからう。

# (11) 所謂畏獸と獸鏡・鋪首

(2)―(10)節にわたつて例を引いて解説を加へた類の他にも、西周から春秋以降に傳統のたどられる獸鏡・鋪首は幾種類があるが、それらは例數も少く、漢以後まで傳つてゐない所から、この論文では省略することにした。

この節では今までに引いて來た獸鏡・鋪首の性格を考へる材料として、所謂畏獸との關聯について考察を加へる。

「畏獸」は晉の郭璞の『山海經』の注に見える語で、『山海經』の中に多く出てくる、動物の身體部分を持つた鬼神に對する呼稱であり、晉時代にその類を畫く畏獸圖といふ繪畫のジャンルのあつたことは長廣氏の注意する所である。長廣氏は特殊的には六朝時代の石刻に例の多い、動物形の人立する鬼神の類を畏獸圖と呼び、詳細な研究を試みられた。長廣氏は六朝の畏獸圖中に現れる様様な鬼神の一つ一つにつき、それを主として『山海經』中の鬼神の記載と比較してその素性を明めようと試みられたのであるが、この方針による研究は不毛なものに終つてゐる。

筆者は個個の畏獸の一つ一つについて素性を當つてゆくといふ方法は採ら

ず、研究の第一段階として、鬼神の中で畏獸といふ一つの類が、どのような性格のものであつたかを認識することを試みる。同時代の鬼神には佛、菩薩像とか道像とか、龍や鳳凰といった傳統的な瑞祥、或いは仙人等と、大きな類別のあつたことは確かであり、その中で細部の表現は變化に富むとはいへ、大きな口に齒を露はした獸形の頭、人立して動物の爪をもつた四肢を擴げる大げさな姿勢、頭や肩から逆立つ長い羽毛等の特徴を共通にする畏獸の類は、その表現の類型に對應した一定の性格をもつた鬼神であつたことが推測される。この推測に誤りなければ、そのような共通の表現の特色をもつた畏獸の中から、その素性の知られる若干種を探し出すことができた場合、それらが共通にもつ性格によつて、畏獸といふ類がどのような種類の鬼神を表はしたのか推定することができると考へる。

畏獸形の鬼神が六世紀の有角の鋪首の額の上に蹲居し、また同類が角の龍に變つた鋪首の頭上に配された類は先に圖37、38に引いた。そしてこれらの鬼神の扱ひは同じやうな位置に配された佛像と同様であり、そのことからその姿の神が超地上的な神であることを推測した。また圖60のごとく頭上に山嶽を戴いた鋪首は、また圖64、65のごとく畏獸形の身體と共に表はされ、それが山嶽神と考へられることも先に記した所である。また身體と共に表はされる例は見出されてゐないが、(8)節に引いた類の中に頭の表現や、前肢から出る長い羽毛において畏獸と共通の特徴をもつものがあり、その内に天上世界に配された天神と目すべきものがあることに注意した。他にまた畏獸形の神で素性を推定することのできるものとして圖161に引いた永安四年銘の重列神獸鏡中に現れる例がある。四神、南極老人、天皇大帝、伯牙ら天上の神神の仲間入りをしてゐる。腹が渦巻きになつてゐる所から筆者は先にこれを蠡形の水神と考へた<sup>22</sup>。この推測の當否は別にしても、少くともこの畏獸形の神が超地上的な神、傳説的な人物の世界に屬する者であることは確かである。

ところで、先に引いた圖65の山嶽を戴く畏獸について更に考へてみるに、この鬼神は圖162に見るやうに、墓誌の蓋の紋様の一部をなすものである。中央に一對の龍がゐる中に粒粒のある圓を中心に對ひ合ひ、その左右と下とに畏獸が走る姿



圖161 畏獸形鬼神，重列神獸鏡，永安4年（261）五島美術館，樋口隆康氏撮

で刻される。これと近い表現は圖163に引いた北魏正光三年（五二三）の馮邕妻元氏墓誌にも見出される。圖162と同時代のものである。<sup>33</sup>この例では墓誌の蓋の上面中央に蓮華があり、その周りを一匹の龍がとり巻き、四隅に畏獸がゐてこれを支へてゐる形である。龍の下——龍の顔の方向から上下が決る——には「搜天」、上には「哈螭」、右には「拓神」、左には「拓遠」の榜題

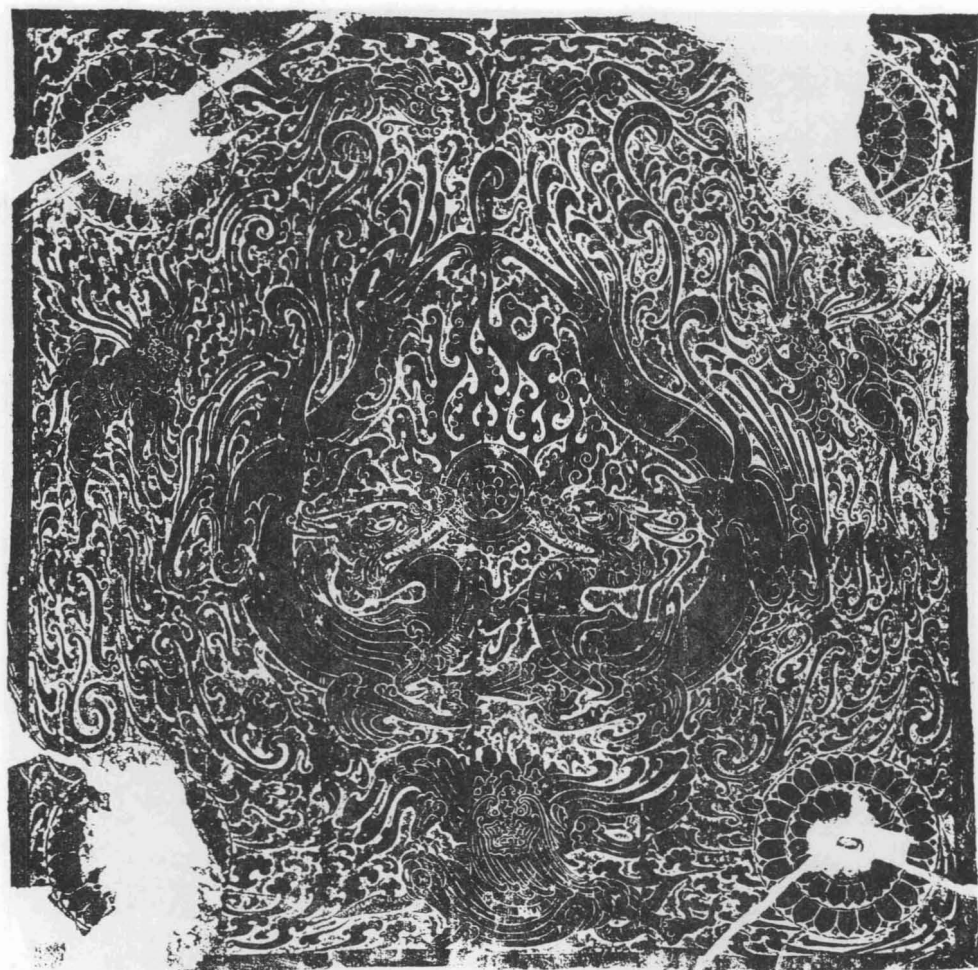


圖162 中央の龍と周囲の畏獸，元昭墓誌，正光5年（524）

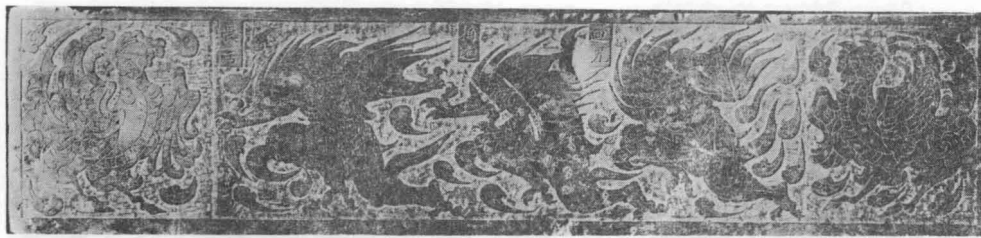
がある。これらの名が榜題のどちら側の畏獸に屬するかについては差當り決め難い。この蓋の下墓誌を刻した石の側面には圖163左のやうな畏獸が雲氣の間を跳ねてゐる。いづれも榜題を伴ふが、長廣氏の研究によると、その名前は文獻資料中に殆んど見出すことができないやうである。<sup>34</sup>然し中に獲天（圖163右面——面の命名は長廣氏による）、辟電（同下面）、掣電（同左面）等の名があり、天とか電光とか、天空に關りを持つことの想像されるものがある。この墓誌は蓋が所謂伏斗形をなし、墓室や敦煌石窟の天井と同形をなすのであるが、高句麗壁畫墓中には藻井乃至伏斗形天井に龍を大きく畫き、その周囲の伏斗形天井に天上世界を畫くものがある。例へば先に圖130に見取圖を引いた輯安



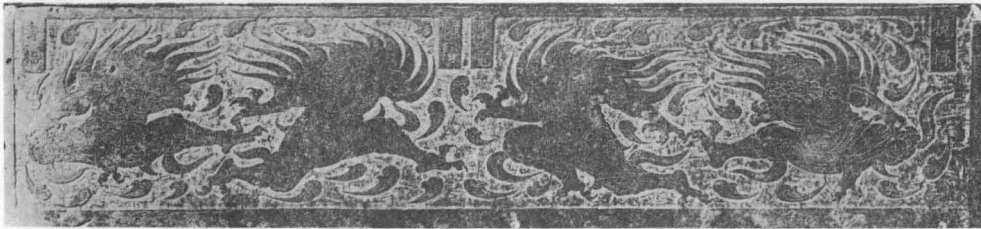
四神塚<sup>③</sup>、同地五盛墳四號墓のごときである。前に記したごとく、前者は六世紀中期のものである。圖130に見るごとく、四神塚は漢井の天井中央に一匹の龍を大きく畫き、その下方には傳説的光景や仙人が、墓室四壁には四神が畫かれる<sup>④</sup>。後者の四壁には圖168に引くごとく四神が畫かれ、そこが四方の星座のかかる天上の空間であることが知られるが、その四隅には畏獸が一體づつ畫かれ、兩手で絡み合つた龍を支へてゐる。圖163と同じテーマである。圖168の場合、四壁の隅に畫かれたため、同じ龍が四度畫かれることになつたと解される。

これらと比較してみると、圖163





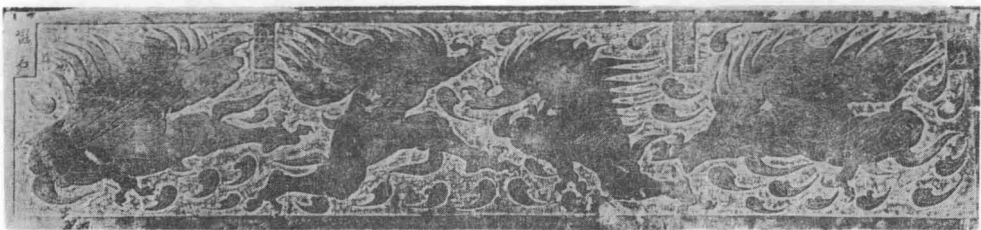
上 面



左 面



下 面



右 面

圖163 中央の龍と周囲の畏獸，馮邕妻元氏墓誌，  
正光三年（522），Museum of Fine Arts,  
Boston







圖164 畏獸「挾石」，敦煌285窟窟頂北面，西魏



圖165 畏獸形雷神，敦煌249窟窟頂西面，西魏



圖166 畏獸形雷神，敦煌285窟窟頂西面，西魏



圖167 畏獸形雷神，太原，婁叡（570年歿）墓

の墓誌の蓋の中央の龍、それを支へる四匹の畏獸は天上世界を刻したものであることが知られる。そしてその下、墓誌本體の側面の畏獸も、天上世界の延長、超地上的世界を表はしたものであることが推測される。

圖163の墓誌側面の畫像中に、名前によつて雷に關係のあることの知られる畏獸がゐたが、北魏及び西魏の敦煌二四九及び二八五窟の伏斗形天井に畫かれた天空の繪の中に圖165、166のやうな太鼓の中で暴れる雷公が畏獸の姿で表はされてゐる。これら敦煌の畫像では身體から出る羽毛の類の表現があつさりしてゐるが、圖163に見るのと全く同様な、典型的な畏獸の表現

を持った雷公は、圖167に引いた太原の北齊裴睿（五七〇年歿）の墓の壁畫に見出される。

敦煌二八五號窟の伏斗形天井にはまた圖164に見るごとき畏獸形の者がある。片手に長い棒乃至板狀のものを持つ。これは恐らく圖163右面の「挾石」に對應する者であらう。これらの例によつて、圖163の墓誌の側面の畏獸が、超地上的世界に住む鬼神と見た先の推測が裏づけられたと考へる。

畏獸形はまた沂南畫像石墓の前室北壁上部楣石にも幾種類かが見出される（圖169）。先に筆者はこの畫像につき、この畫像の東半部の左端に上下に並んで朱雀と玄武の像がある所から、大體横二列に並んだこの畫像全體は、四方の神を四邊形に沿つて畫き、パンタグラフをたんで平らにしたやうな具合に、二列に表はしたのではないかと考へた。<sup>39</sup>ここに畫かれた畏獸も、朱雀や玄武といった星座の神の仲間入りをしてゐる所から、當然天上世界の住人といふことが推測されることになる。

馮邕之妻元氏墓誌の側面に刻まれたのと同様な畏獸の列は、鞏縣石窟寺中にも幾つかの窟に例がある。圖170に引いたのは第一窟北壁の下部に彫られたもので、元氏墓誌右面左端に出てくると同じ嚙石の像が見出される（圖171上列、左端）。またその右には圖64と近い、山を戴いた畏獸形の鬼神も見出される。<sup>40</sup>長廣氏は兩者は年代的にもほぼ同時代であると考へてゐる。兩者の畏獸の列が同じ性格のものであることは疑ひない。この鞏縣石窟寺の例では畏獸の列の上にあるのは佛像である。圖162、163、168で畏獸の更に上方、天の最高部に位置した龍の代りに佛像が配されてゐることになる。圖162等で天の最高部に位する龍が何を表はしたのか今の所明かでないが、位置から判斷して最高の存在であることは疑ひない。鞏縣石窟寺を造營した佛教徒は、これを彼等の最高存在である佛に置き代へたのである。

鬼神の世界における畏獸の性格、位置づけは以上見た所によつて明かであらう。この畏獸は最高の存在よりも一段低い地位に分類された自然神で、超地上的世界に棲む者である。雷、電光、山嶽等、自然現象、或いは顯著な自然を象徵する



北壁東半

東壁北半



南壁西半

西壁南半

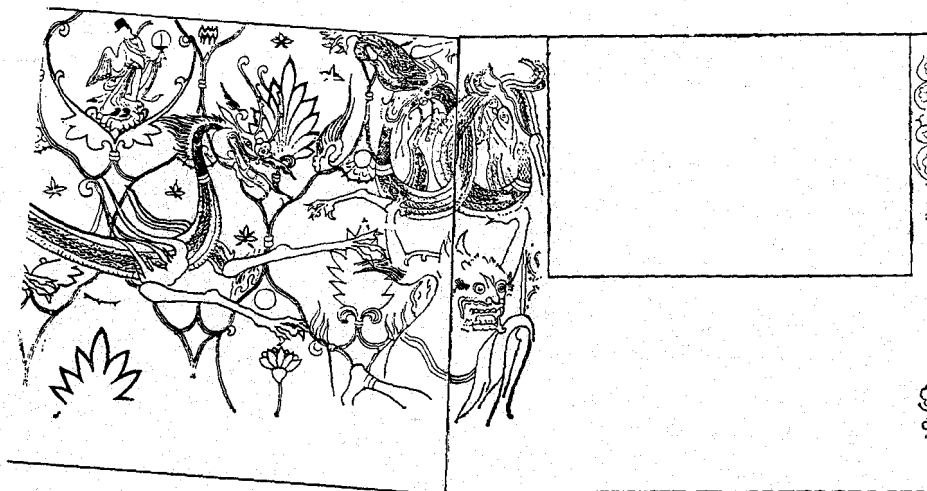
神神であり、従つて種類も  
 少くないわけである。この  
 畏獸は、先にも見たやう  
 に獸鑑・鋪首が身體と共に  
 表はされたものであつたの  
 であり、それは殷、西周時  
 代の犧首に系統のたどられ  
 るものである。先に筆者は  
 殷、西周時代の犧首につい  
 て、それが最高神である帝  
 よりも一段と格の下つた肉  
 體化、地上化された鬼神で  
 あることを證した。その遙  
 か降つた後裔である漢—六  
 朝の問題の鬼神がそれらの  
 祖先と基本的な性格におい  
 て一致してゐることを知  
 り、先の筆者の考への正し

獸・錦首の若干をめぐって



西壁北半

北壁北半



東壁南半

南壁東半

圖168 龍を支へる畏獸，輯安五盔墳4號墓墓室，6世紀

かつたことを論證することができたと考へる。

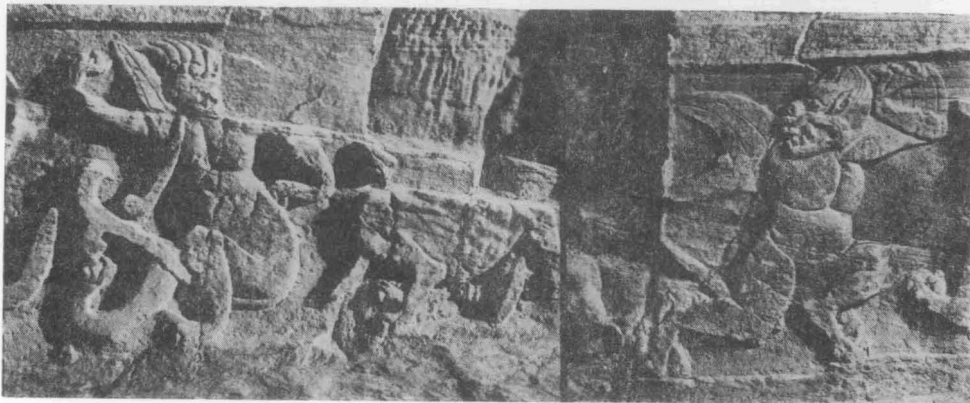




圖169 天上四方の畏獸，沂南畫像石墓前室北壁楣石

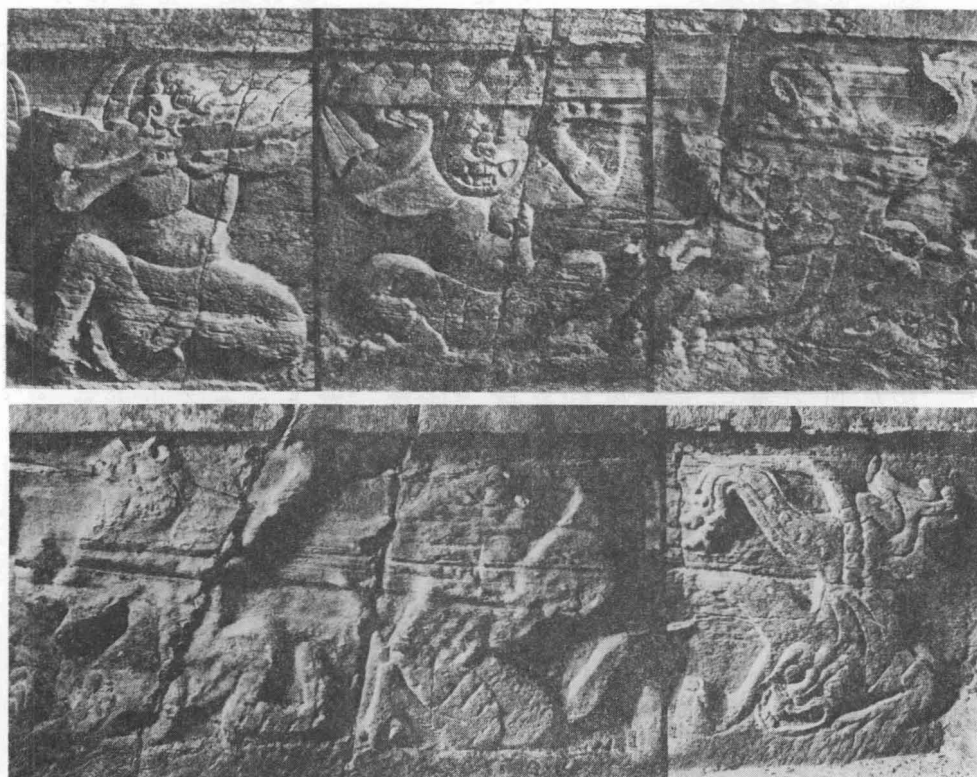


圖170 佛像の下の方の畏獸の列，鞏縣第一窟北壁下部，6世紀前半頃



## 注

- (1) 從來漢から唐に至る時期の醜惡な顔の形で、乃至はその顔を持った鬼神の全身像の形で表はされた圖像(所謂畏獸)は、鬼瓦との關聯においてとり上げられてゐる(小杉一九三八)。中で村田治郎氏の「中國建築に用いられた鬼面史概説」(村田一九六八)は材料が丹念に拾つてあり、良い手引となる。然し鬼面の種類分けは行はれてゐない。なほ、前肢を立てて狍犬のやうな姿勢で坐る醜惡な面がまへの鬼神、所謂魑頭はここではとり上げない。五世紀以前に遡るものが知られず、この論文に取扱ふ材料とは直接つながらないと考へられるからである。林一九七六。
- (2) 『説文解字』「蝸、羸也」の條の段玉裁注參照。
- (3) この論文は修正を要する所が多いが、この部分について問題はない。林一九六一。
- (4) 以下春秋I、II、IIIは林一九七二、附論(春秋戰國時代文化の基礎的編年による。春秋の終りは前四五三年とする説による。戰國時代については誤解を避けるため世紀で記すことにした。林一九七二、五八五—五九四頁。
- (5) 佚文。『藝文類聚』等所引。王一九八一、下五七七頁による。
- (6) 水野、長廣一九四一、一四〇頁の次の別表第二。
- (7) もつとも、醜惡な顔をした水神で公輸般がそつとその姿を寫したといふ話のあるのは蠶に限られない。村留神といふ水神についても似たやうな話が傳へられる(王利器一九八一、五七七頁參照。また森一九五二、二一〇—二二二頁參照)。なほ、この安濟橋にはまた魯般(公輸般)が作つたといふ傳説があるのと(余一九五六、一七頁)この水神の像とは何か關係があるかも知れない。
- (8) 相似た例で大同南郊窖藏出土のもの(大同市博物館一九八三、圖版四、3)は圖37と似たやうな形に獸の頭にパルメットがある。
- (9) 林一九八四、圖九六。
- (10) 奥村一九三九、三六一頁。
- (11) 林一九八四、七六一七頁。
- (12) 北魏正光六年(五二五)銘彌勒佛石像臺座(Siren 1925, vol. II, Pl. 151A)、右端馬の頭の前方の蓮の葉が極めて近い。
- (13) 頭上に山は戴かないが、山嶽の上に肱を張つて立つ神は慶州窺岩面廢寺址出土塚がよく知られる(藤島一九三八、附圖第四上左)。
- (14) 長廣一九六九、一〇七—一四一頁。
- (15) 例へばSalmony 1938, Pl. 49, 1, Pl. 59.
- (16) 同墓出土の壁でも、圖92との比較から、戰國時代からの傳世品と知られるものもある(中國社會科學院考古研究所、河北省文物管理處一九八〇、圖九四、1)。
- (17) 廣州市文物管理委員會、廣州市博物館一九八一、圖二七〇、4。
- (18) 今まで引いたもので言へば圖15、26、49、80。
- (19) 樋口一九七九、二四三頁。
- (20) 池内、梅原一九四〇、圖版七八。
- (21) 新郷市博物館一九八一、圖版一一、3。
- (22) 兩者とも葉狀部分が比較的幅廣く、中に廣い凹み乃至色變りの部分を持ち、一番基部に近い、短い葉の圓つこい形をもつ所が近似する。また四神塚のパルメットは背面に短い鉤形葉狀のものが出る所に特色があるが、同様なものは様式から東魏と判定されるフリア美術館藏の石彫三尊佛碑像(Reg. no. 13. 75)の龕の縁に見出される。
- (23) 紋様を細い縦方向の紐乃至棧で織り込んだ、乃至は押へた形の表現型式も共通してゐる。
- (24) 水野、長廣一九四一、一四〇頁の向ひの別表第二。
- (25) 小杉一雄は鬼瓦の鬼の顔が所謂畏獸の頭であることに注目したが(小杉一九三八)、畏獸の何たるかについては立ち入った考察を行つてゐない。
- (26) 長廣一九六九、一一一—一一三頁。

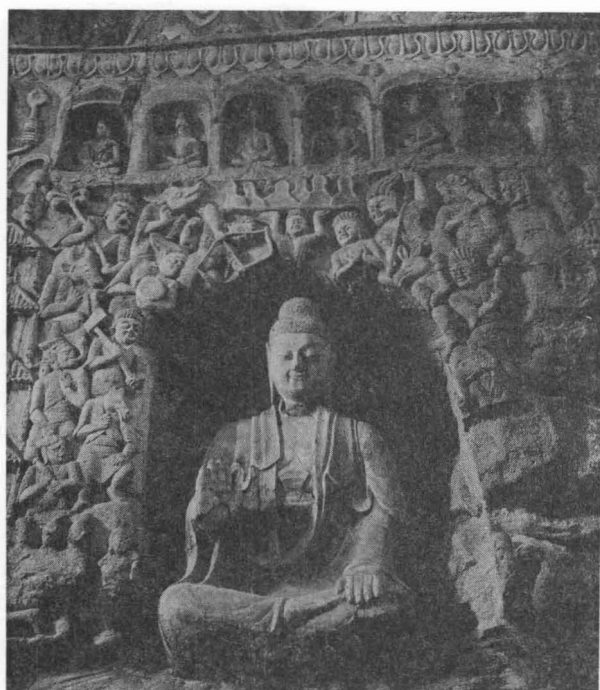


圖171 釋迦降魔像，雲岡第6洞西壁，6世紀後期

獸鏢・鋪首の若干をめぐつて

(39) これとよく似た、山を戴いて蹲居する圖像で圖171の佛龕の頂部に彫られてゐるやうな人間形のものがある。同様な圖像は鞏縣石窟寺中にも見出される。例へば第三窟中心柱、柱座南面に見るときである(河南省文化局文物工作隊一九六三、圖版一四八)。これも異なつた種類の鬼神と並んで彫られてゐるが、ここでは何れも畏獸形とは異なり、人間の姿をもつ。そして先の畏獸形の圖像が周壁に彫られてゐるのに對し、この一連の人間形鬼神は鞏縣石窟寺ではいづれも中心柱の基部に彫られてゐる點、明かに區別される。詳細に論ずるのは別の機會にゆづるが、この一類はまた碑像の基臺の兩側及び後面に刻されることもあり、榜題を伴ふ東魏武定元年(五四三)銘の三尊佛石像(水野、長廣一九三七、第二十二圖。Chavannes 1914, Pl. 20, 25, 27の複寫)によつてこの類の多數は名を知ることができ、それらの大部分が畏獸とは別系統のものであることがわかる。この榜題入の圖像中にこの山を戴いた神は出て來ないが、それが何であるかは圖171の雲岡の例によつて知られる。この圖像全體についてその報告書にはこれが釋尊成道を妨害するため「魔王はあらゆる種類の醜惡な怪物を動員して攻めた。しかし釋尊はつひにこれらの魔衆を降伏せしめて、成道に達した」光景であると解説されてゐるだけであるが、(水野・長廣一九五一、三、本文冊、六五頁、雲岡石窟寺の降魔の圖柄については第十洞主室西壁のものについての解説がやや詳細である。圖柄の説明の後に「いつたい經典には降魔をといったものはすくなくないが、曇曜の『雜寶藏經』(大正大藏經、第四卷、四八一頁)卷七には「魔王バアビヤン(波旬)來りて佛を惱せんとする緣」といふのがあつて、それはただ魔王との問答、地神の證明、魔王群衆の顛倒のみをいひ、その他の經でいふやうな魔衆のこまかい形容や、息子たちの制禦や三女の誘惑はのつてゐない……おそらく『雜寶藏經』によつたものかと思ふが云々」と記される。そして問題の山を戴く像については「龕の頂上には逆髮形の魔が山嶽をさし上げてゐる」と魔衆の一人としてゐる。

- (30) 同右、一一三一—一四一頁。
- (31) 樋口氏は吳の永安四年(二六二)と解してゐる(樋口一九七九、二二四頁)。
- (32) 林一九七三、五三頁。
- (33) 圖162の元昭墓誌は北魏正光五年(五二四)。
- (34) 長廣一九六九、一一九—一二三頁。
- (35) 池内、梅原一九四〇、圖版七〇—九二。
- (36) 吉林省文物工作隊一九八四。
- (37) 墓室四隅には次に記す五盃埴同様畏獸が畫かれるが、四匹の畏獸は天井の龍ではなく、四壁から上の天井全體、即ち天上世界全體を支へる形になつてゐる。
- (38) 林一九七四、二二八—二二九頁。

(水野、長廣一九五一—五、七、本文、五一頁)。筆者はこの山を捧げる神だけは魔衆ではなく、地神と見るべきであると考へる。水野氏の引かれる『雜寶藏經』中の降魔の物語は次のやうなものである。魔王が釋迦如來を海に放り込むぞと威した時、如來は魔王に對し、お前は前世で僅かし功徳を施さなかつたために大魔王となつた。自分は澤山の功徳を施したのでこのやうに生れてゐるのだ、と言ふ。魔王は自分のことはわかつてゐるが、お前のことは誰が證明してくれるのか、と言ふ。佛は地を指し、この地が證してくれる、と言ひ終るや大地が震動し、地神が出て來て證言してくれた、といふのである。佛龕の頂上で正面を向いて坐した問題の神は、他の魔神が釋迦に向つて攻撃的威嚇的なポーズをとるのと明確な相違がある。これは、中國で傳統の長い山嶽を戴いた山嶽神の姿になぞらへて佛傳中の地神を表はしたのだと解すれば、良く説明がつくのではなからうか。この佛傳中の地神は雲岡で龕の中央に位置を占めてゐるが、圖64の畏獸形の山嶽神も同様、中心的な位置を占めてゐると言ふことができる。即ち、棺の頭の側には門が刻され、楣の上には蓮華の上に乗つた寶珠が表はされてゐるが(奥村一九三九、挿圖一)、中に入れられる人から言つて右側の棺側には青龍、左手には白虎が刻まれ、棺の足の側に刻まれた山嶽神は方位から言ふと北側といふことになるが、北は天の運行の中心のある方位、即ち天上世界の中心と言ふことができるからである。圖162の元昭墓誌の蓋でも、山嶽神は中央の大きな一對の龍の下に配され、この龍を隔てて對稱の位置にはやはり前引畫像石棺と同様、一種の寶珠形があり、この山嶽神も同様な方位に配されたと見られる。また身體を持たない、頭上に山嶽を戴いた鋪首も、三足の石床の中央の足に配されてゐる(圖56、57、58)。南北の別のない場合でもこれが中心的な位置にふさはしい格をもつた鬼神であると意識されてゐたことが知られる。この神は佛傳中で「この地有りてより來り、我は恒に中に在り」と名乗る地神を表はさうとした時、その姿を借りるにうつつ

けの者であつたと考へられる。  
(40) 長廣一九六九、一二五—一二六頁。

# 插圖出所目錄

- 圖1 羅一九三六、一一、二。同、一三、四五、二。
- 圖2 Minneapolis Institute of Arts 寫眞より
- 圖3 京都大學人文科學研究所(以下京大人文研と略稱)考古資料
- 圖4 Sackler Collection 拓本
- 圖5 熱河省博物館籌備組一九五五、圖版七、下
- 圖6 小山等一九七五、圖版二一八
- 圖7 郭寶鈞一九六四、圖版九一、3
- 圖8 Victoria and Albert Museum 寫眞
- 圖9 郭寶鈞一九五九、圖版六六
- 圖10 京大人文研考古資料
- 圖11 孫海波一九三七、一〇四
- 圖12 安一九五三、圖一七、4
- 圖13 京大人文研考古資料
- 圖14 安徽省文化局文物工作隊一九六三、圖六、9
- 圖15 The Cleveland Museum of Art 寫眞
- 圖16 京大人文研考古資料
- 圖17 孫海波一九三九、一六
- 圖18 京大人文研考古資料
- 圖19 同右
- 圖20 同右
- 圖21 The British Museum 寫眞
- 圖22 京大人文研考古資料
- 圖23 中國社會科學院考古研究所、河北省文物管理處一九八〇、上、圖一六七、1

- 圖24 京大人文研考古資料
- 圖25 郭建邦一九八一、圖五
- 圖26 江村治樹氏寫真
- 圖27 河南省文化局文物工作隊一九五八、彩色圖版
- 圖28 京大人文研寫真資料
- 圖29 大同市博物館一九八三、圖版四、1
- 圖30 河北省博物館、文物管理處一九八〇、三一五
- 圖31 中國科學院土木研究所、清華大學建築系一九五七、圖版二七
- 圖32 常盤、關野一九三九—四一、九、圖版一五
- 圖33 京大人文研考古資料
- 圖34 同右
- 圖35 Victoria and Albert Museum 寫真
- 圖36 常盤、關野一九三九—四一、七、圖版二〇
- 圖37 出光美術館寫真
- 圖38 京大人文研考古資料
- 圖39 常州市博物館一九七九、圖二一
- 圖40 出光美術館寫真
- 圖41 奧村一九三九、圖一
- 圖42 山西省考古研究所、太原市文物管理委員會一九八三、圖版二、1
- 圖43 郭寶鈞一九六四、圖版九〇、二
- 圖44 河南省博物館、信陽地區文管會、信陽市文化局一九八一、圖二一左
- 圖45 山西省文物管理委員會侯馬工作站一九六三、圖八、11
- 圖46 安志敏一九五三、圖一七、3
- 圖47 河北省文化局文物工作隊一九六五、圖版五、2
- 圖48 郭寶鈞一九五九、圖版一〇八、1
- 圖49 中國社會科學院考古研究所、河北省文物管理處一九八〇、上、圖一八、2
- 圖50 京大人文研考古資料

獸銀・鋪首の若干をめぐつて

- 圖51 京大人文研考古資料
- 圖52 同右
- 圖53 中國科學院考古研究所一九五九、圖五七、10
- 圖54 Yells 1929, vol. II, Pl. 57, B246
- 圖55 平凡社寫真
- 圖56 京大人文研考古資料
- 圖57 同右
- 圖58 京大人文研寫真資料
- 圖59 陝西省文物管理委員會一九六六、圖三九より
- 圖60 京大人文研考古資料
- 圖61 黃漢傑一九六五、圖三、7
- 圖62 京大人文研資料寫真
- 圖63 同右
- 圖64 奧村一九三九、挿繪二
- 圖65 京大人文研石刻資料
- 圖66 孫一九三七、二
- 圖67 京大人文研考古資料
- 圖68 邊一九七二、圖七
- 圖69 京大人文研考古資料
- 圖70 同右
- 圖71 同右
- 圖72 河北省文物管理處一九七九、圖二四
- 圖73 京大人文研考古資料
- 圖74 同右
- 圖75 同右
- 圖76 中國科學院考古研究所一九五七、圖四六、2
- 圖77 廣州市文物管理委員會、廣州市博物館一九八一、圖七四、2
- 圖78 山西省文物管理工作委員會、山西省考古研究所一九六二、八頁、圖6

- 圖 79 郭勇一九六三、圖八
- 圖 80 中國科學院考古研究所一九五九 a、圖五〇、3
- 圖 81 南京博物院一九七三、圖二四
- 圖 82 關野貞他一九二七、圖版、下、八三一
- 圖 83 河北省文物工作隊一九六四、圖版五、6
- 圖 84 京大人文研考古資料
- 圖 85 同右
- 圖 86 中國社會科學院考古研究所、河北省文物管理處一九八〇、圖一六二、2
- 圖 87 京大人文研考古資料
- 圖 88 同右
- 圖 89 容一九三四、八八
- 圖 90 京大人文研考古資料
- 圖 91 郭寶鈞一九五九、圖版八四、2
- 圖 92 山東省文物考古研究所等一九八二、圖二一六、上
- 圖 93 商一九三五、尊、一四
- 圖 94 中國社會科學院考古研究所、河北省文物管理處一九八〇、圖九四、2
- 圖 95 廣州市文物管理委員會、廣州市博物館一九八一、圖一六九
- 圖 96 徐州市博物館、沛縣文化館一九八二、圖五、5
- 圖 97 廣州市文物管理委員會、廣州市博物館一九八一、圖一九三
- 圖 98 同右、圖二三七、8
- 圖 99 山西省文物管理委員會侯馬工作站一九六三、圖一一、6
- 圖 100 山西省文物工作委員會晉東南工作組、山西省長治市博物館一九七四、圖一〇
- 圖 101 京大人文研考古資料
- 圖 102 同右
- 圖 103 容一九三四、一一六
- 圖 104 京大人文研考古資料
- 圖 105 廣州象崗漢墓發掘隊一九八四、圖版四、4
- 圖 106 中國社會科學院考古研究所、河北省文物管理處一九八〇、圖版二二一、2
- 圖 107 京大人文研考古資料
- 圖 108 Freeer Gallery of Art 寫真
- 圖 109 容一九三四、一五四
- 圖 110 中國社會科學院考古研究所、河北省文物管理處一九八〇、圖二九
- 圖 111 山西省文物管理委員會、山西省考古研究所一九六二、圖4、1
- 圖 112 河北省文物工作隊一九六四、圖一五、7
- 圖 113 關野貞等一九二七、圖版、上、二八〇
- 圖 114 定縣博物館一九七三、圖四
- 圖 115 商一九三五、式、一五
- 圖 116 梅原一九五九一六二、六、四五〇
- 圖 117 廣州市文物管理委員會、廣州市博物館一九八一、圖一八七、9
- 圖 118 京大人文研考古資料
- 圖 119 李供奉一九八三、圖二、1
- 圖 120 中國科學院考古研究所洛陽發掘隊一九五六、圖一一、1
- 圖 121 周到、呂品、湯文興一九八〇、圖六
- 圖 122 周到、李京華一九七三、圖一四
- 圖 123 南陽市博物館、方城縣文化館一九八〇、圖二三
- 圖 124 江蘇省文物管理委員會一九五九、圖二〇
- 圖 125 南京博物院一九八一、圖一三
- 圖 126 Becke 1943, T. 21
- 圖 127 Segalen, Voisins et Lartigue 1935, Atlas, Pl. 21
- 圖 128 林一九七四、圖二
- 圖 129 筆者拓本
- 圖 130 池內、梅原一九四〇、第一六圖、圖版九〇、(2)
- 圖 131 水野、長廣一九三七、圖版四八

- 圖 132 陝西省文物管理委員會一九六六、圖四〇
- 圖 133 京大人文研寫真資料
- 圖 134 京大人文研寫真資料（水野、長廣一九四一、圖版六三）
- 圖 135 京大人文研考古資料
- 圖 136 同右
- 圖 137 同右
- 圖 138 郭寶鈞一九五九、圖版五八、2
- 圖 139 同右、圖版七九、3
- 圖 140 山西省文物管理委員會侯馬工作站一九六三、圖一一、2
- 圖 141 京大人文研考古資料
- 圖 142 京大人文研考古資料
- 圖 143 孫海波一九三九、一四
- 圖 144 京大人文研考古資料
- 圖 145 同右
- 圖 146 山西省文物管理委員會、山西省考古研究所一九六四、圖二、6
- 圖 147 Erdberg 1978, p. 221, no. 16
- 圖 148 京大人文研考古資料
- 圖 149 同右
- 圖 150 同右
- 圖 151 咸陽市博物館繪葉書
- 圖 152 中國科學院考古研究所一九五七、圖九五
- 圖 153 中國科學院考古研究所一九五六、圖一一、2
- 圖 154 京大人文研考古資料
- 圖 155 同右
- 圖 156 姚生民一九八二、圖二、1
- 圖 157 *Important Chinese Works of Art: The Collection of Mr. and Mrs. Richard C. Bull* (Southernby Auction Catalogue, no. 200)
- 圖 158 京大人文研考古資料

獸鑲・鋪首の若干をめぐって

- 圖 159 郭寶鈞一九五九、圖版五二、6
- 圖 160 Salmony 1938, Pl. 48, 6
- 圖 161 京大人文研考古資料
- 圖 162 京大人文研石刻資料
- 圖 163 Museum of Fine Arts, Boston 寫真
- 圖 164 敦煌文物研究所一九八〇、一四五
- 圖 165 同右、一〇四
- 圖 166 同右、一六六
- 圖 167 山西省考古研究所、太原市文物管理委員會一九八三、圖版三、2
- 圖 168 吉林省文物工作隊一九八四、圖三一六より
- 圖 169 林一九七四、圖3
- 圖 170 河南省文化局文物工作隊一九六三、圖版71—79
- 圖 171 京大人文研寫真資料

# 引用文獻目錄

日本文、中國文

- 安徽省文化局文物工作隊一九六三「安徽淮南蔡家崗趙家孤堆戰國墓」『考古』一九六三、四、二〇四—二二二
- 安志敏一九五三「河北唐山賈各莊發掘報告」『考古學報』六、五七—一二六
- 池內宏、梅原末治一九四〇『通溝、下、滿洲國通化省輯安縣高句麗遺蹟』東京
- 梅原末治一九五九—六二『日本蒐儲支那古銅精華』京都
- 王利器一九八一『風俗通義校注』北京
- 奧村伊九良一九三九「渡金孝子傳石棺の刻畫に就て」『瓜茄』五、三五九—三八二
- 河南省博物館、信陽地區文管會、信陽市文化局一九八一「河南信陽市平橋春秋墓發掘簡報」『文物』一九八一、一、九一—四頁
- 河南省文化局文物工作隊一九五八『鄧縣彩色畫象磚臺』北京



- 河南省文化局文物工作隊一九六三『鞏縣石窟寺』北京
- 河北省博物館、文物管理處一九八〇『河北省出土文物選集』北京
- 河北省文化局文物工作隊一九六五『河北易縣燕下都故城勘察和試掘』『考古學報』一九六五、一、八三一—一〇五頁
- 河北省文物管理處一九七九『河北平山縣戰國時期中山國墓葬發掘簡報』『文物』一九七二、一、一一三一頁
- 河北省文物工作隊一九六四『河北定縣北莊漢墓發掘報告』『考古學報』一九六四、二、一二七一—一九四頁
- 郭建邦一九八一『河南孟津送莊漢黃腸石墓』『文物資料叢刊』四、一二一—一二四頁
- 郭寶鈞一九五九『山彪鎮與琉璃閣』北京
- 郭寶鈞一九六四『濬縣辛村』北京
- 郭勇一九六三『山西省右玉縣出土的西漢銅器』『文物』一九六三、一一、四一二—四一五頁
- 吉林省文物工作隊一九八四『吉林集安五盔墳四號墓』『考古學報』一九八四、一、一二一—一三五頁
- 小杉一雄一九三八『鬼瓦考』『夢殿』一八、二四九—二五七頁
- 小山富士夫等一九七五『故宮博物院』東京
- 江蘇省文物管理委員會一九五九『江蘇徐州漢畫像石墓』北京
- 黃漢傑一九六五『福建閩侯關口橋頭山』『考古』一九六五、八、四二五—四二七頁
- 廣州市文物管理委員會、廣州市博物館一九八一『廣州漢墓』北京
- 廣州象崗漢墓發掘隊一九八四『西漢南越王墓發掘初步報告』『考古』一九八四、三、二二二—二三〇頁
- 山西省考古研究所、太原市文物管理委員會一九八三『太原市北齊裴叡墓發掘簡報』『文物』一九八三、一〇、一一三三頁
- 山西省文物管理工作委員會、山西省考古研究所一九六二『太原太堡出土的漢代銅器』『文物』一九六二、四、五、六六一—七二、九四頁
- 山西省文物管理委員會侯馬工作站一九六三『山西侯馬上馬村東周墓葬』『考古』一九六三、五、二二九—二四五頁
- 山西省文物管理委員會、山西省考古研究所一九六四『山西長治分水嶺戰國墓第二次發掘』『考古』一九六四、三、一一一—一三七頁
- 山西省文物工作委員會晉東南工作組、山西省長治市博物館一九七四『長治分水嶺二六九、二七〇號東周墓』『考古學報』一九七四、二、六三一—六四四頁
- 山東省文物考古研究所、山東省博物館、曲阜縣文管會一九八二『曲阜魯國故城』濟南
- 徐州市博物館、沛縣文化館一九八一『江蘇沛縣栖山漢畫像石墓清理簡報』『考古學集刊』2、一〇六一—一二頁
- 常州市博物館一九七九『常州南郊戚家村畫像磚墓』『文物』一九七九、三、二二—四二頁
- 周到、李京華一九七三『唐河針織廠漢畫像石墓的發掘』『文物』一九七三、六、二六—四〇
- 周到、呂品、湯文興一九八〇『河南漢畫像磚的藝術風格與分期』『河南文博通訊』一九八〇、三、八一—一四頁
- 商承祚一九三五『十二家吉金圖錄』北平
- 新鄉市博物館一九八一『新鄉北朝、隋、唐石造像及造像碑』『文物資料叢刊』五、一二四—一三一頁
- 關野貞他一九二七『樂浪郡時代の遺蹟』東京
- 陝西文物管理委員會一九六六『陝西省三原縣雙盛村隋李和墓清理簡報』『文物』一九六六、一、二七一—四二頁
- 孫海波一九三九『河南吉金圖志腹稿』北平
- 孫海波一九三七『新鄭彝器』北平
- 大同市博物館一九八三『山西大同南郊出土北魏鑲金銅器』『考古』一九八三、一一、九九七—九九九頁
- 中國科學院考古研究所一九五七『長沙發掘報告』北京

中國科學院考古研究所一九五九『洛陽中州路』北京

中國科學院考古研究所一九五九a『洛陽燒溝漢墓』北京

中國科學院考古研究所洛陽發掘隊一九五六『洛陽澗濱古文化遺址及漢墓』

『考古學報』一九五六、一、一一—二八

中國社會科學院考古研究所、河北省文物管理處一九八〇『滿城漢墓發掘報告』北京

中國科學院土木建築研究所、清華大學建築系一九五七『中國建築』北京

塚本善隆一九五三『大石佛』(『アテネ新書』)東京

定縣博物館一九七三『河北定縣四三號漢墓發掘簡報』『文物』一九七三、一、八一—二〇頁

常盤大定、關野貞一九三九—四一『支那文化史蹟』九、東京

敦煌文物研究所一九八〇『敦煌莫高窟』一、東京

長廣敏雄一九六九『六朝時代美術の研究』東京

南京博物院一九七三『銅山小龜山西漢崖洞墓』『文物』一九七三、四、二二—三五頁

南京博物院一九八一『徐州青山泉白集東漢畫像石墓』『考古』一九八一、二、一三七—一五〇頁

南陽市博物館、方城縣文化館一九八〇『河南方城東關漢畫像石墓』『文物』一九八〇、三、六九—七二

熱河省博物館籌備組一九五五『熱河凌源海島管子村發現古代青銅器』『文物參考資料』一九五五、八、一六一—七

林巳奈夫一九七二『中國殷周時代の武器』京都

林巳奈夫一九七三『漢鏡の圖柄』二、三について『東方學報』四四、一—六五頁

林巳奈夫一九七四『漢代の鬼神の世界』『東方學報』四六、一二三—一三〇六  
林巳奈夫一九七六『中國古代の獸面紋をめぐって』『MUSEUM』三〇、一、一七一—二八頁

林巳奈夫一九八四『所謂鸞鳳紋は何を表はしたものでか』同時代資料による論

獸・鋪首の若干をめぐって

證一『東方學報』五六、一一—九七頁

林巳奈夫一九八六『殷周時代青銅器紋様の研究』(『殷周青銅器綜覽』二)東京

樋口隆康一九七九『古鏡』東京

藤島玄治郎一九三八『朝鮮出土の古瓦について』『夢殿』一八、四九—七二頁

邊成修一九七二『山西長治分水嶺二六號墓發掘簡報』『文物』一九七二、四、三八—四七頁

水野清一、長廣敏雄一九三七『響堂山石窟の研究』京都

水野清一、長廣敏雄一九四一『龍門石窟の研究』京都

水野清一、長廣敏雄一九五一—九五五『雲岡石窟』京都

村田治郎一九六八、『中國建築に用いられた鬼面紋史概説』『鬼面紋瓦の研究』、明石

森鹿三一九五二『公輸般に關する二三の説話』『東方學報』京都二、二〇七—二一六頁

余哲德一九五六『趙州大石橋石欄的發現及修復的初步意見』『文物參考資料』一九五六、三、一七一—二六

容庚一九三四『武英殿彝器圖錄』北平

姚生民一九八二『陝西淳化出土戰國秦銅器』『考古與文物』一九八二、一、一〇—九頁

羅振玉一九三六『三代吉金文存』

李洪甫一九八三『連雲港市錦屏山漢畫像石墓』『考古』一九八三、一〇、八九—一八六頁

## 歐 文

Erdberg, Eleanor von, 1978: *Chinese Bronzes from the Collection of Chester Dale and Dolly Carter*, Ascona

Ecke, Gustav, 1943: *Sammlung Lochow, Chinesischen Bronzen*, I, Peking

*Important Chinese Works of Art: The Collection of Mr. and Mrs. Ricard*

C. Bull (Southernby Auction Catalogue) 1983

Chavannes, E., 1914: Six monuments de la sculpture chinoise, *Ars*

*Asiatica*, II

Salmony, A., 1938: *Carved Jade of Ancient China* (1982, reprinted by

Han-shan Tang)

Segalen, V., de Voisins, G. et Lartigue, J., 1935: *L'art funéraire à*

*l'époque des Han*, Paris

Sirén, O., 1925: *Chinese Sculpture from the Fifth to the Fourteenth*

*Century*, London

Yelts, W. P., 1929: *The George Eumorfopoulos Collection, Catalogue of*

*the Chinese and Korean Bronzes, Sculpture, Jades, Jewellery and*

*Miscellaneous Objects*, London